

## 禅のこころと宗門関係学校の教育

鶴見大学仏教文化研究所主任 下室 覚道

### はじめに

筆者は平成二八年度第四十七回宗門関係学校教職員研修会の発表の機会を得た<sup>(1)</sup>。宗門関係学校の宗門とは「禅宗で自宗をいう語」であり、ここでは曹洞宗を指す。つまり、宗門関係学校とは曹洞宗に関わる学校である。個々の学校の設立目的の大半は、「仏教、就中、曹洞宗の精神に則り学校教育を行うこと」であり、宗教教育を学生に施した上で、それぞれの学業を成就し社会に貢献することが肝要であろう。

宗門関係学校教職員においては研究の他、教育が重視されるが、毎年行われているこうした研修会に参加することにより、曹洞宗門の教育や禅のこころというものに改めて目を向け、また、大本山に宿泊するという貴重な経験によつて禅の精神を体得することになる。大変重要な意義ある研修会であると思う。

ところで、最近は多くの過去に有り得なかつた、予想し得ない問題、事件が発生している。ジャーナリストの寫信彦氏も指摘しているように、世界各国でその国が持っていた社会常識、倫理感などが次々と崩れるような事件が相次いでいる<sup>(2)</sup>。世界各地でテロが起こり、日本においても想定外の殺人事件が頻発している。以前であれば恨みが原因で殺人が行われたが、動機も利他的で見知らぬ人を殺傷に及ぶ犯罪が多発している。これらの原因はなぜであろうか。

筆者はその原因の一つが教育にあると感じている。特に、現在の「宗教」や「道徳」を蔑ろにしている教育が一因であると思う。成績のみを過剰に評価し、宗教や道徳に見られるような人格や道義などが評価されない現在の状況は

問題があると考える。

本稿では、国の宗教政策、宗教系大学の建学の精神、筆者なりの禅の捉え方などについて見ていく。ただし、筆者は教育学の専門家でないので不備な点多々あると思うが、宗教系大学に宗侶として所属する教員として、宗教教育について卑見を記したものである。

本稿は、平成二八年度宗門関係学校研修会において発表したものを加筆修正したものである。

## 一 宗教教育と私立大学

まず、「宗教教育」とは何か。辞書の説明を見てみよう。

特定の宗派の信仰へ導く教育。または、宗教に対する理解を深め、宗教によって人格を形成しようとする教育を意味することもある。<sup>(3)</sup>

ある特定の宗教に導くような教育、あるいはその宗教対して理解を深めることにより、人格を高めていくこととされる。その他の辞書には、

広義には聖職者養成を目的とした教育を含むが、一般的には、世俗人の絶対者（神・仏）への帰依、信仰心の育成を目的とした教育をいう。宗教教育は、絶対者の前における人間の平等を教えた反面、現世の秩序・権力への服従を肯定しがちな傾向を示した。学校における宗教教育の位置づけは、（１）教育の最高目標、（２）諸教科のなかの一つ、（３）学校教育からの排除（教育の世俗化）の三つに大きく分けられるが、近代学校では（１）（２）から（３）への移行が世界的流れといえる。宗教的情操や信仰心を養うことを目的とする教育。<sup>(4)</sup>

とあって、教育を施す対象に関して、聖職者だけではなく一般人に対しても行われる事、学校教育における宗教教育は、教育の最高目標から排除まで幅があることが記されている。

この学校教育における宗教教育に対して外国ではどのような扱いかと言えば、先頃EU離脱を決めたイギリスにおいては必修科目とされ、キリスト教、就中、英国国教会を中心に教育が行われている。その他、多くの国で宗教教育が行われているが、先に示したように近代になって公教育と宗教との関係が問題となり、フランスなどでは公教育から一切の宗教を除いているという。

それでは日本ではどうか。日本では戦前は皇国史観に立脚した教育が行われたが、戦後、日本国憲法第二十条に「信教の自由」が記されており、宗教は尊重されるべきものであるが、国および国立の機関は宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならないと規定している。公立学校からの宗教教育の排除（教育の世俗化）が世界的傾向であるが、日本もこの路線を歩んでいる。

それでは、憲法第二十条を掲げる。

〔信教の自由〕

第二十条 信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。

② 何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。

③ 国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。<sup>(5)</sup>

③には、国の機関は、宗教教育などの宗教的活動が禁止されている。それ故、国の政府によって運営又は設立されている大学である国立大学は宗教教育が禁じられている。

また、教育基本法の「宗教教育」に関する項目には次のように定められている。

（宗教教育）

第十五条 宗教に関する寛容の態度、宗教に関する一般的な教養及び宗教の社会生活における地位は、教育上

尊重されなければならない。

2 国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。<sup>(6)</sup> 教育基本法第十五条では、国及び地方公共団体が設置する学校、つまり、公立学校では、宗教教育や宗教的活動が禁じられている。いわゆる宗教学の教育（一般的な宗教を研究する学問）を禁止しているものではなく、「特定の宗教教育」が禁止されている。

これに対して、私立学校はどうであろうか。文部科学省の方針には次のように記されている。私立学校法第一条には、「この法律の目的」が定められており、

第一条 この法律は、私立学校の特性にかんがみ、この自主性を重んじ、公共性を高めることによって、私立学校の健全な発達を図ることを目的とする。<sup>(7)</sup>

と記されている。「私立学校の特性」とは国立や公立の学校と異なり、私立学校が私人の寄附財産等によって設立・運営されることを原則とするものであることに伴う特徴的な性格である。私立学校において、建学の精神や独自の校風が強調されたり、文部科学省（以下文科省）など所轄庁による規制ができるだけ制限されているのもこの特性に根ざすものとされる。

「また、文科省の方針には「私立学校の果たす重要な役割」について、次のように記されている。

【私立学校の果たす重要な役割】

私立学校に在学する学生・生徒などの割合は、大学・短大で約8割、高等学校で約3割、幼稚園で約8割、専修学校・各種学校で約10割を占めており、私立学校は我が国の学校教育の発展に大きく貢献しています。また、近年ますます国際化・高度情報化する社会の中で、各私立学校には、多様化する国民のニーズ（需要）に応じた特色ある教育研究の推進が求められており、それぞれが建学の精神に基づき個性豊かな活動を積極的に展開して

います。このように、私立学校は、我が国の学校教育の発展にとって、質・量両面にわたり重要な役割を果たしています。<sup>(8)</sup>

ここにも建学の精神に基づき個性豊かな活動を積極的に果たすべきことが記されている。

つまり、国立や公立の学校は宗教活動が禁じられるが、私立学校は建学の精神に基づき宗教活動も認められ、かつ、国公立にはない個性豊かな活動が求められている。

また、特に大学に関しては、公益財団法人大学基準協会（英語：Japan University Accreditation Association, 略称：JUA）がある。この組織は、大学等を対象とする機関別・専門分野別第三者認証評価機関である。大学等の高等教育機関は二〇〇二年の学校教育法の改正により、二〇〇四年度以降、すべての大学は文部科学大臣の認証を受けた評価機関（認証評価機関）により七年以内の周期で認証評価を受けることが義務づけられている。認証評価の目的は、大学の質を保証し、評価結果が公表されることにより、大学が社会による評価を受け、評価結果を踏まえて大学が自ら改善を図ることとされている。

公益財団法人大学基準協会が行う大学評価の基準となるものが、「大学基準」であり、大学が適切な水準を維持し、その向上を図るための指針を定めるものである。その中の「理念・目的」には、次のように記されている。

〔理念・目的〕

1 大学は、その理念に基づき、人材育成の目的、その他の教育研究上の目的を適切に設定し、公表しなければならぬ。<sup>(9)</sup>

ここにも「その理念に基づき」と記されており、建学の精神の重要性を示すものである。

また、日本高等教育評価機構が定める具体的な認証評価の基準の中にも、

(B) 大学評価基準（認証評価の基準）

基準 1 建学の精神・大学の基本理念及び使命・目的

1・1・1 建学の精神・大学の基本理念が学内外に示されていること。

1・1・1 建学の精神・大学の基本理念が学内外に示されているか。

1・2 大学の使命・目的が明確に定められ、かつ学内外に周知されていること。

1・2・3 大学の使命・目的が学外に公表されているか。<sup>(10)</sup>

とあつて、建学の精神・大学の基本理念が学内外に示されていることが一つの評価基準となつている。同評価基準 3 にも「建学の精神」「大学の理念」の文字が見出される。

基準 3 教育課程

3・1 教育目的が教育課程や教育方法等に十分反映されていること。

3・1・1 建学の精神・大学の基本理念及び学生のニーズや社会的需要に基づき、学部、学科又は課程、研究科又は専攻ごとの教育目的が設定され、学則等に定められ、かつ公表されているか。<sup>(11)</sup>

こうして見てくると「建学の理念、精神」に基づく学校運営がいかにも求められているかが理解できる。大学評価のポイントを稼ぐということも重要であるが、設立者の意志に鑑みて、大いに建学の精神を挙揚しなければならぬと思う。

若原道昭氏は建学の精神に関して次のように述べている。

私立大学の建学の精神は、まさに創設者の熱意そのものであります。熱意の現れそのものであります。そして、

この建学の精神が最近強調される傾向が非常に強まってきているのですけれども、それはどうしてかと言いますと、一つは先ほど申しましたように、自分の学校の特色はこうですということを社会に向かってアピールしてく、そしてその特色に賛同してくれる、魅力を感じてくれる若者を引きつけたいということでもあります。<sup>(12)</sup>

建学の精神を強調することによって、社会に向かってアピールし、学生を引きつける結果になるという。

先にも見たように、日本では国公立学校が特定宗派の宗教教育を行うことは禁じられており、その教育は画一的にならざるを得ない。しかし、私立学校では戦後、公共性とともに自主性が法的に裏付けられ、それぞれに熱烈な教育愛に燃えた創立者の建学の精神を基調とし、特色ある教育を実践しており、現代はそれが切実に求められる時代である。

現在、大学においては、四人のうち三人が私立大学に通っている状況である。私立学校は、我が国の学校教育の発展にとって、質・量両面にわたり重要な役割を担っている。最近では世界的に不景気のためか、国立大学志望者が増えているという。しかし、国公立大学と私立大学との授業料を比較すれば、昭和五〇年度では、私立大学は国立大学の五・一倍であったが、現在は一・六倍を維持しているおり、差が大幅に縮小していることが分かる。<sup>(13)</sup>

最近の新聞記事にも、私立大学志向が強まっていることが記載されている。

同社（リクルート）「消費税増税で国公立志向が高まったが、再増税先送りもあって、私立志向が回復した。

大学生の7割以上が私立なので、景気がおおきな影響を与える」とみている。<sup>(14)</sup>

リーマンショックなどの不景気により国公立志望が一時増加したが、現状では私立大学の延べ志願者数はここ数年増加しているという。

## 二 明治時代の国の宗教政策

それでは、宗教系の私立学校の建学の精神は何か。まず、キリスト教系の私学の精神を見てみたい。キリスト教系の私学は、キリスト教の教えを教育理念とし設立され、運営されている私立学校であり、キリスト教主義学校とも言われる。このキリスト教系の私学の影響を受けて、多くの仏教系の私学が生じたという歴史がある。

明治初期からキリスト教の宣教師は私塾を開くなどして、とくにエリート層の若者に強い影響力をもち始めた。

その教育事業が本格化すると、仏教界は危機感を覚え、明治時代の中期以降、僧侶の師弟教育だけでなく、一般人々を対象とする学校の設立に着手した。それらは現在、仏教大学（浄土宗）、駒澤大学、愛知学院大学（曹洞宗）、立正大学（日蓮宗）、龍谷大学（浄土真宗）、大正大学（浄土宗・天台宗・真言宗）、花園大学（臨済宗）など、宗門系の大学となっている。<sup>15)</sup>

明治維新によって政治体制は大きく転換したが、宗教政策においても大きな方向転換がなされた。

明治六年（一八七三）、明治政府は全国のキリスト教禁制の高札を撤去した。つまり、豊臣秀吉により天正一五年（一五八七）にバテレン追放令（伴天連追放令）が出され、さらに江戸幕府も慶長一七年（一六一二）に禁教令を布告して以来、凡そ三百年にわたるキリスト教禁制が明治六年（一八七三）に解かれたのである。<sup>16)</sup> 実際には、「信教の自由」が認められるのは、明治二二（一八八九）年の大日本帝国憲法の発布によってである。<sup>18)</sup>

安嶋彌氏は、明治政府によるキリスト教解禁に伴いキリスト教が広まった背景を次のように述べている。

さて、明治六年、キリスト教の解禁（禁教の高札の撤去）に伴って、キリスト教が一部の知識階級や旧幕臣を中心に急速に拡がったのは、文明開化の一環として西洋文明に対する憧れとともに反藩閥感情があつたからと思われ。さらにこの背景には欧米、主としてアメリカにおけるミッション（ミッションという言葉は、16世紀以降、未開地に対する布教に関する）情熱があつた。<sup>19)</sup>

こうして、キリスト教思想家であり無教会主義を唱えた内村鑑三（一八六一—一九三〇）や現在の同志社大学を設立した宗教家・教育者の新島襄（一八四三—一八九〇）、日本救世軍の創設発展に尽力した山室軍平（一八七二—一九四〇）などの傑出した人物が輩出し社会に影響を与えたのである。

ところで、王政復古の旗印の下に立ち立って明治維新政府は、その権威のために天皇陛下を神権者とする国家神道を国教化する政策を採用した。そして、次のような宗教政策が取られた。



明治四年の廃藩置県まで、維新政府は祭政一致の方針をつらぬくため、明治元年閏四月神祇官を設置し、全国の神社、神主等はすべて神祇官の指揮を受けることにした。政府はまた同年三月、神仏分離の令を出し、これがきっかけとなって、全国に廃仏毀釈の運動が起こり、仏教界に大きな打撃を与えた<sup>(20)</sup>。

明治政府は、神道と仏教の分離が目的であり、廃仏毀釈までの仏教排斥を意図したものでなかったが、結果として多くの仏教寺院が廃合され、僧侶の神職への転向、或いは、仏像・仏具の破壊が行われた。坂本龍馬をはじめとする維新の志士達を尊敬する方は多いが、結果的に仏教が破壊され、変容してしまったが故に明治維新政府の特に宗教政策に対しては個人的に高く評価できない。

因みに、明治の宗教政策の影響が今に残っているのが、僧侶の肉食妻帯である。明治五年（一八七二）四月二五日に太政官布告が出された。

僧侶の肉食・妻帯・蓄髪、並びに、法要の外は一般の服を着用随意たらしむ。

それまで僧尼令によって定められていた肉食妻帯の禁を解く布告がなされた。さらに同年九月には僧侶にも一般人民同様に苗字を称させる太政官布告が出された。これらはずまり、国家としては出家者を特別扱いたくないということの表れであり、国家神道を樹立する上で当然のことであった。

国家神道を何故樹立しなくてはならなかったか。思うに、江戸時代末期の慶応三年一〇月一四日（一八六七年一月九日）に江戸幕府第十五代将軍徳川慶喜が政権返上を明治天皇に奏上したが、「大政奉還上表文」には「同心協力、共ニ皇国ヲ保護仕候得ハ、必ス海外万国ト可並立候、」と記されている。つまり、当時は諸外国との競争に負けることなく並び立つことが優先され、それが宗教政策にも表れたと見るべきかもしれない<sup>(21)</sup>。

月尾嘉男氏は、

明治政府が国家目標とした三本柱は「富国強兵」「殖産興業」「四民平等」であり、これらの実現によって西洋

社会を追跡する「文明開化」を達成することが目標であった。<sup>(22)</sup>

と述べられ、西欧に追いつけ追い越せという姿勢であったことが分かる。それにより、

結果として欧米の植民地になることを回避し、産業や経済を世界一流にすることに成功した。<sup>(23)</sup>

と指摘している。明治政府の施策がなかったならば欧米の植民地になっていたかもしれないし、今日の繁栄はなかったと指摘している。ところが、現在はこの路線が破綻しつつあるという。

明治以来、日本が目指してきた増大拡大、三極集中、労働中心、自然開発、官公主体、工業振興という社会は一九八〇年代までは見事に世界の趨勢に適応してきたが、その頂点に到達したときに、社会環境が逆転しはじめたのである。そして、残念ながら、その異変への適応に出遅れたのが現在の日本の状況なのである。<sup>(24)</sup> 今後の国の政策に期待したい。宗教政策についても変化が生ずるかもしれない。

### 三 キリスト教系私大の建学の精神

以上、明治維新の宗教政策により、神仏分離、そして、キリスト教解禁がなされたことを見てきたが、それによって今日見るようなキリスト教系私学が生まれたのである。キリスト教系私学の建学の精神をいくつかの大学に見てみよう。各大学のホームページの中から特に建学の精神に関わる記述を取り上げた。

#### 上智大学

##### 建学の理念

上智大学はその後、様々な時代の変遷をぬって成長してきたが、建学理念は一貫して変わらない。それは、「キリスト教ヒューマニズム」の精神を根幹とする大学であり、世界の人々と共に歩む「隣人性」と「国際性」を貫

く「大学」であるという理念である。<sup>(25)</sup>

「キリスト教ヒューマニズム」いう文字を見いだすことができる。ヒューマニズムとは人間を第一とする考え方である。

上智大学の歴史は、一九〇六年（明治三九年）にローマ教皇ピウス十世はイエズス会に対し、日本へ宣教師を派遣して高等教育機関を設置することを要請した。これを受けて一九〇八年（明治四一年）、日本に大学を設立するために三人のイエズス会員が来日し、一九一一年（明治四四年）財団法人上智学院を設立、一九一三年に専門学校令による大学を開校した。その後、一九二八年には大学令による大学となり、文学部と商学部から成る旧制大学となった。

### 国際基督教大学

#### 建学の精神

本学は、基督教の精神に基づき、自由にして敬虔なる学風を樹立し、国際的社會人としての教養をもって、神と人とに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資することを目的としています。本学は、国際的協力により設置された大学として、次の3つの使命を掲げ、その実現に努めています。

国際性への使命（I）…さまざまな国籍や文化的背景をもつ人々がともに学び、働く、共同生活の場である本学では、日英両語により教育が行われ、また、海外諸大学との交換留学制度をはじめ、世界との多様な交流の場を実現しています。

キリスト教への使命（C）…高等教育の場である本学は、キリスト教信徒をつくることを目的とはしていません。その使命は、宗教も含めて、人間存在のあらゆる次元の問題を探究し、考究を深めることにあります。

学問への使命（U）…本学、真理を探究し、学問的自由を守り、その内実を豊かにすることを使命として創立

されました。真理を求め、伝達する上で最大の成果を得るためには、最高の学問的水準と学問の自由を維持することが必要です。知の共同体である本学には、それを守る責任、期待、励ましが与えられています。<sup>(26)</sup>

国際基督教大学設立において、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）最高司令官を務めたダグラス・マッカーサーも、大学設置に際し財団の名譽理事長として、米国での募金運動に務めた。開学に先立って一九五二年に語学研修所が開設された後、一九五三年に初代学長として湯浅八郎を迎え、一期生一九八人より開学に至った。

## 聖心女子大学

聖心女子大学は、マグダレナ・ソフィア・バラが一八〇一年にフランスで創立した聖心女子学院の教育理念に基づいて、設立された大学である。

その教育理念は、一人一人の人間をかけがえのない存在として愛するキリストの聖心に学び、自ら求めた学業を修め、その成果をもつて社会との関わりを深めることにある。この精神（「聖心スピリット」）は、世界各地の聖心姉妹校に共通するものである。

本学は、この建学の精神に基づき、

- ・ 高度な学術的・専門的知識の探究を通じ、新たな知の世界を切り拓く創造力と批判力を養い、それにより高められる豊かな教養を備えた人間を育成する。
- ・ 個としての自己を確立し、かつ地球を共有する人類の一員として世界を視、人々と交わり、そしてこれらの重要な関心事に自ら関わることでできる広い視野、感受性、柔軟性および実践的な行動力を持つ人間を育成する。
- ・ 社会の急激な変動に対応できる思考力と判断力を持ち、現代のみならず、未来に向けても自らの考えを自らの言葉で発信できる人間を育成する。

この目標を実現するために、大学・教職員・学生・卒業生は、一体となって聖心の教育コミュニティを形成する。大学および教職員は常に研究・教育水準の向上に努め、学生および卒業生は、その育まれた資質や成果を在学時に培われた「聖心スピリット」とともに広く社会に還元できるように、それぞれにおいてその責任と積極性が求められるものである。<sup>(27)</sup>

開校は一九一六年。私立聖心女子学院高等専門学校を前身とし、一九四八年、新学制により聖心女子大学として発足した。

## 東京女子大学

### 建学の精神

東京女子大学は、北米プロテスタント六教派の援助を得て、一九一八（大正七）年「キリスト教の精神に基づいて女子に高等教育を施すことを目的とする」という建学の精神のもと、リベラル・アーツ・カレッジ「私立東京女子大学」として創立されました。

この建学の精神は、学校法人東京女子大学寄附行為に、「教育基本法及び学校教育法に従い、女子高等教育を行うことを目的とすること」、「キリスト教の精神をもって、人格形成の基礎とする」こととして定められています。

二〇一八（平成三〇）年に創立一〇〇周年を迎えますが、少人数教育により、学生一人ひとりを大切に育てる伝統を守りながら、新たに二一世紀に生きる女性を育成することを目指して、グローバル化・情報化・多様化する社会に対応する教育を行う女子大学として、次の一步を踏み出しています。

### 教育理念・目的

東京女子大学は、学則に定められているとおり、キリスト教を教育の根本方針となし、女子に高度の教養を授け、専門の学術を教授研究し、真理と平和を愛し人類の福祉に寄与する人物を養成することを理念・目的としています。この理念・目的に基づいたりべラル・アーツ教育が本学の教育方針です。<sup>(28)</sup>

エディンバラ宣教会議一九一八年専門学校令に基づき、東京府豊多摩郡淀橋町字角筈（現在の新宿）にて開学。初代学長は新渡戸稲造。一九二三年安井てつが二代学長に就任する。一九二四年に現在の杉並区善福寺へ移転した。

## 青山学院

### 教育方針

青山学院の教育はキリスト教信仰にもとづく教育をめざし、神の前に真実に生き 真理を謙虚に追求し愛と奉仕の精神をもつてすべての人と社会とに対する責任を進んで果たす人間の形成を目的とする。

青山学院大学は、「青山学院教育方針」に立脚した、神と人とに仕え社会に貢献する「地の塩、世の光」としての教育研究共同体である。本学は、地球規模の視野にもとづく正しい認識をもつて自ら問題を発見し解決する知恵と力を持つ人材を育成する。それは、人類への奉仕をめざす自由で幅広い学問研究を通してなされる。

本学のすべての教員、職員、学生は、相互の人格を尊重し、建学以来の伝統を重んじつつ、おのおのの立場において、時代の要請に応えうる大学の創出に努める。<sup>(29)</sup>

右記には「地の塩、世の光」とあるが、この言葉は『新約聖書』の「マタイ福音書」の「第五章十三節から十六節に記述がある。そのほか「マルコ福音書」と「ルカ福音書」に同様の記述がある。意味は、塩には腐敗を防ぐ性質があるが、塩は地を清める力をもつ。これは日本でも塩に穢れを払う力があることと共通するものである。塩が地を清め、光が闇を照らすように、キリスト信者は社会における塩や光の役割を果たすことを目指すという。

青山学院大学は、キリスト教による人格教育を標榜するChristian Universityだす。その教育の中心は毎日チャペルで行われる大学礼拝であり、キリスト教概論などの学科目も多数用意されています。<sup>(30)</sup>

学校法人青山学院は、明治七年（一八七四年）にスクーンメーカーによって麻布本村町に設立された「女子小学校」と明治十一年（一八七八年）にジュリアス・ソーパーによって築地に設立された男子校の「耕教学舎」、明治十二年（一八七九年）にロバート・マクレイによって横浜山手に設立された男子校「美會神学校」を母体としている。

### 立教大学

立教の創始者、ウィリアムズ主教を語るとき、「道を伝えて己を伝えず」という言葉がよく使われます。見せかけや名声のための善行を嫌い、真の信仰者を貫いたウィリアムズ主教の生き方は、創立当初から「キリスト教に基づく教育」をうたってきた立教の建学の精神の中に、今も脈々と受けつがれています。

キリスト教に基づく教育とはいったいどんなものでしょうか。キリスト教は大学の持つ本来的な姿勢に対して何らそれを束縛し、規制しようとするものではなく、ましてや信仰を強制するものではありません。キリスト教本来の姿は、人間をあらゆる束縛から解放して、自由に真理を追い求めることのできる場へ導こうとするものです。そこに求められるのは、真理への畏敬の念であり、真理探究への謙虚な姿勢です。<sup>(31)</sup>

米国聖公会（英国国教会起源の会派）の宣教師で、大阪の川口居留地に住み、英語塾「聖テモテ学校」を運営していたチャニング・ムーア・ウィリアムズ主教が、一八七四（明治七）年上京し、聖書と英学の教育を目的として東京・築地の外国人居留地に設立した私塾である立教学校に始まる。その後、関東大震災により築地校舎の消失に遭うも一九一八（大正七）年、現在の池袋に移し現在に至る。

#### 四 宗門大学の建学の精神

次に、宗門関係学校、特に大学の建学の精神を見てみたい。各大学のホームページの中から特に建学の精神に関する記述を取り上げた。

##### 駒澤大学

文禄元年（一五九二年）に駿河台の吉祥寺に創設された学林を起源とする。学林とは江戸時代、仏教各宗派で設立した僧侶教育機関。学寮、檀林とも呼ばれた。禅の実践と仏教の研究、漢学の振興を目的としていた。明暦三年（一六五七年）に吉祥寺駒込に移転し、中国の名僧であった陳道榮が旃檀林と命名した。

その後、吉祥寺学寮を中心にして青松寺学寮（獅子窟）と泉岳寺学寮を統合した「曹洞宗大学林専門学本校」が明治一五年（一八八二年）に開校し、明治三八年（一九〇五年）に「曹洞宗大学」と改称をし、大正一四年（一九二五年）大学令に基づき旧制の「駒澤大学」と改称、発展した。

駒澤大学は宗侶養成を起源としているが、この大学令に基づき宗侶の子弟以外にも広く門戸を開放するようになった。

##### 建学の理念

駒澤大学は「仏教」の教えと「禅」の精神を建学の理念、つまり教育・研究の基本とする大学です。

仏教は、物事の本質の洞察に基づいて、あらゆるものを大切に扱う心を教えてくれます。仏教では、この洞察を「智慧」、この心を「慈悲」と言います。駒澤大学は、さまざまな学問を深く広く探求することをおして、智慧を磨き慈悲の心を育みながら自己を陶冶し成長していく場です。

この智慧と慈悲による自己形成を目指す仏教のいとなみを、禅では「修」（修行）といい、その理想の姿を



「証」（悟り）といいます。曹洞宗の開祖・道元禪師は、理想の「証」は彼方にあるのではなく、私たちの日々のいとなみである「修」の中にこそ活かしている、と説かれ、それを「修証一等」（修行と悟りは一体である）という言葉で示されました。

この禪師の教えを大学の教育・研究の理想的なあり方として簡潔に表現したのが、「行学一如」です。それは、大学では自己形成を目指す「行」と、学問研究である「学」とは一体であるという意味であり、それが建学の理念を表わす言葉として用いられてきたのです。

駒澤大学における「行」とは、仏教の高い倫理観のもと、学問研究を自らの血とし肉とする作業であり、それがそのまま本当の「学」ということなのです。こうして形成されていく自己は、卒業後も実社会のなかで、より広い慈悲の心とより高い智慧を求め、常に新たな学びをつづけてゆくはずで、この絶えざる自己形成こそが、駒澤大学が掲げる理想の学びなのです。<sup>(32)</sup>

#### 愛知学院大学

明治九年（一八七六年）、曹洞宗により曹洞宗専門支校として創立された。そのため、同じ曹洞宗が創設した駒澤大学と東北福祉大学とは姉妹校である。

#### 教育理念

愛知学院大学は、専門の理論と応用を教授・研究し、あわせて本学設立の主旨である仏教精神を基とした「行学一体」の人格形成に努め、「報恩感謝」の生活のできる社会人を養成し、広く世の各界に寄与し、人類の福祉と文化の発展に貢献することを教育理念としています。

愛知学院が明治九年（一八七六）の創立から今日まで、一貫して堅持し続けてきた建学の精神である「行学一

「体」とは、曹洞宗の開祖道元禪師の宗教体験にもとづく教えですが、教育の次元ではつぎのように理解しています。

「行」とは「人間形成」あるいは「自己を磨く」ということであり、「学」とは「真理の探究」・「知識を磨く」ことを意味しています。「知識を修得」しつつ「自己を磨く」ことを一体と捉えることは、単に知的な理解だけに満足しないで、進んで身心を傾けて真に身についた学問を実践して人間的完成をめざす修学態度をいいます。その意味で「行学一体」とは「知の実践」ということができます。

また、「報恩感謝」とは、われわれ一人ひとりあらゆる存在との相互依存の関係において生かされているという釈尊の教えに基づいています。わたしたちは自己の正しい認識と把握によって、人として自らの不完全さを自覚した時、親の恩、師の恩、友の恩をはじめ、天地自然の多くの恵みや地上の生きものすべてから恩恵を受けて、生かされていることに気づき、周囲への感謝の想いが自ら湧き上がってきます。その意味で「報恩感謝」は「己の把握」を表わしています。

仏教の教えの根本は、人間としての真のあり方を追究する積極的な姿勢にあります。社会に役立つ自主性に富む社会人の養成を目的とする本学の教育は、現実を客観的に正しく見つめ、いかなる場合にも中正な判断をくだすことができるように自己を磨くことをめざしています。自己とは何かという原点に戻り、揺るぎない己の確立をはかる道を示したことが本学の建学の精神です。

このような「行学一体・報恩感謝」の精神こそ、本学の教育の特色であり、理念を普遍させて「自分の可能性に挑戦し、協働の場で主体的に活躍できる人」の育成を理想としています。<sup>(33)</sup>

明治八年（一八七五年）に昌傳庵に設立された曹洞宗専門支校が前身であり、先に示した駒澤大学、愛知学院大学とは姉妹校になる。

#### 建学の精神及び教育の理念

行学一如「学業も実践も本は一つ」。自利・利他円満「支え合い、ともに幸せに」

東北福祉大学は『行学一如』を建学の精神に掲げ、その教育の理念は『自利・利他円満』の哲学を基調とし、人間力、社会力をもつ人材を世に送り出している。

即ち、本学が目指すところは、「人間は凡て生かされつつ、生かしつつ」を信条とし、「それぞれの人間の持てる力を出し合い、互いに支え合いながら生き甲斐を感じられるような社会」を実現することであり、建学以来受け継いできた「学問研究と実践実行は全く一体である」ことを認識し、この両者の両立・調和（『建学の精神』）を図りうる人材の育成にある。<sup>33)</sup>

#### 駒澤女子大学

一九二七年に駒沢高等女学院（駒澤学園の母体）が創立し、一九八九年に駒沢より東京都稲城市へ全校移転した。

一九九三年に駒沢女子大学（「日本文化学科」と「国際文化学科」の二学科）が開学した。

#### 建学の精神

駒沢女子大学は、道元禅師の「正念」と「行学一如」という禅の精神を基盤として「国際化・情報化の進展、女性の社会参加の拡大など、急速な社会構造の変化にのぞみ、十分に自己を実現し、新しい文化の創造的担い手となる人間性ゆたかな現代女性を養成すること」（学則第一条）を教育の目的としています。<sup>35)</sup>

## 鶴見大学

鶴見大学の始まりは、一九二四年（大正一三）大本山總持寺御開山太祖瑩山禪師の六百回大遠忌を記念して「光華女学校」が発足したことに始まる。主発は女子教育を主眼とする大学であった。初代校長に新井石禪禪師（一八五六—一九二七）、初代学長に中根環堂博士（一八七六一—一九五九）が就任した。一九四七年には学制改革により鶴見女子中高等学校となる。さらに一九五三年には鶴見女子短期大学、一九五六年には三松幼稚園、一九六三年には鶴見女子大学が設置され、その後共学化されるに至った。<sup>36</sup>

大学学則には設立の目的を以下のように記している。

### 鶴見大学学則、第一条

#### 第一章 総則

##### （目的）

第一条 本学は、教育基本法（昭和二二年法律第二五号）の趣旨にのっとり、学校教育法（昭和二二年法律第二六号）に基づき、高い教養とともに、専門の知識を授け、あわせて禅的行持によって社会福祉の増進及び社会文化の向上に貢献する道義あつき賢良なる人材を育成することを目的とする。<sup>37</sup>

高い教養と専門知識の修得だけでなく、「禅的行持によって社会福祉の増進及び社会文化の向上に貢献する」とあり、宗敎大学として禅的行持を教育の支柱とする。建学の精神を見てみよう。

##### 建学の精神

本学は、仏敎、とくに禅の敎えにもとづいて、円満な人格の形成と人類社会に対する感謝・報恩の実践をもつて建学の精神としています。この精神を、本学の創設に深くかかわられた中根環堂先生は、

大覚円成 報恩行持

の二句八字をもって示されました。これを分かりやすく表現すれば、「感謝を忘れず真人となる」あるいは、「感謝のこころ育んでいのち輝く人となる」となります。

人類は、みずからの「知」によって優れた技術を生み出し、物質的繁栄をもたらしました。しかし、その一方で、他者に対する思いやりの心や、広く社会のために尽くそうとする高邁な精神を見失いがちになりました。さらに、現在は、自然破壊を進めるなどのことによって、地球そのものの存続すら懸念されるほどになっています。

私たちは、この点を深く反省して、人として生をうけたことに感謝し、自然との「共生」と相互の「共成」に努めなければなりません。

本学で学ぶ皆さんが、優れた知恵と豊かな心をもつ人間として、明るい未来の創造に貢献できる存在へと成長していつてくれることを、心から期待します。<sup>38</sup>

橋本弘道氏は鶴見大学の建学の精神と理念に関して次の様に述べている。

まず、本学の建学の精神と教育理念については、初代校長である中根環堂先生の掲げた建学の精神と教育理念について言及しなければなりません。もともと本学園は、宗侶養成を目的とした学校が時代の流れと共に発展し在家教育も行なうようになったという学校ではなく、純粹に在家の女子教育のために設立された学校です。私は、この点について注目したいと思っております。曹洞宗には宗門関係学校と呼ばれている学校がありますが、宗侶養成を起源としない学校が設立されたのは曹洞宗では、本学が初めてであったのではないかと思います。<sup>39</sup>

仏教系の学校の歴史を見れば、とくに古い大学は僧侶を養成する教育機関であったものから出発しているものが多いが、先の駒澤女子大学と同じく鶴見大学は在家の女子教育のために設立された。それでは、何故女子教育かといえ

ば、明治のはじめごろ女子教育不毛の時代に「このまま見すごすわけにはいかない」と、私立学校の先覚者たちが、女子教育に力を注いだという経緯があり、鶴見大学もその流れにあるからである。鶴見大学は共学に変わったが、現代の国際的流れから見ても、女子の特性を磨き、その自立を促し、社会進出を目指す人間教育は大変重要なことである。

## 五 禅のころ

それでは禅とは何か、禅のころとは何かについて考えたい。禅とは何かと一言で表現するのは難しい。様々な切り口があるので、まず、辞書的記述を見てみよう。

【禅】*dhyaṇa*、*jhana*の音写。①瞑想の意。定・静慮・思惟修などと漢訳する。禅定ともいう。心の統一と安定に関する一表現。精神統一。心を一つの目的物にそそいで、心が散ったり乱れたりすることを防ぎ、智慧を身に付けて真実の理にかなう修行法。安らい。②四禅天。③坐禅の略。④禅宗の略。⑤禅宗の説く教えの意。<sup>40</sup>

禅という言葉自体は、インドの言葉である*dhyaṇa*、*jhana*を音写して禅那とし、そこから「那」が取れて禅になったという。「考える」などを意味する「*dhya*」からの派生語で「沈思」から「思想」、そして仏教においては「瞑想によつて獲得された心の特定の状態」を意味する言葉である。漢訳では、これに思惟修あるいは静慮などの語が当てられている。因みに、禅という漢字そのものは、「天子が位を讓ること」あるいは「天子が神を祀ること」を意味するものである。

禅の源流はインドのヨーガの修行法にさかのぼる。モヘンジョ・ダロ出土の印章の文様の中に、シヴァ神の原形ではないかと推測される像がある。両脚を開き、両足の裏、あるいはかかとを合わせて坐っている人物の浮き彫りである。<sup>41</sup>

四禅天とは色界の四つの天で、禅を修することによつて生まれ変わるとされる天界である。性欲や食欲を離れた世

界である。

禅の修行法は仏教の起こる以前からの行法からきている。これが禅宗という一つの宗派になるのは、中国においてである。

【禅宗】坐禅・内観の法を修めて、人間の心の本性をさとうとする宗派をいう。仏心をさとうすることを目的とするから仏心宗ともいう。インドのボーディダルマによつて五二一年（または五二七年）にはじめてシナに伝えられ、五祖弘忍の門下のうち、慧能によつて南宗が、神秀によつて、北宗が興り、二派に分かれた。（以下略）<sup>(4)</sup>

「七転八起」で有名な達摩は、禅宗では最も重要な祖師の一人であり、中国禅宗の初祖として敬われている。それでは、禅の教えとはどのようなものであろうか。中国で発展した禅の教えを、端的にあらわしている四つの句がある。次の四つのキーワードである。

1. 不立文字…文字によらずに心から心へ伝えられる教え。
2. 教外別伝…經典には書かれていない直接心に伝えられる教え。
3. 直指人指…あれこれ思い悩んだり理屈をこねない、自分の心そのものをつかみ出す。
4. 見性成仏…自分自身が本来もっている仏性（成仏の資質）を見出すこと。<sup>(43)</sup>

釈尊の教えの真髄、禅の真髄は、文字や言葉では伝えることができず、心から心へと、直接体験によつてのみ伝えられるとするのが、不立文字・教外別伝の意味するところである。直指人心とは、「直ちに人の心を指す」ということだが、人の心つまり人心と仏心とは、本来別の心ではありません。直ちに指し示される人心とは、私たちの心の奥にある仏心にほかなりません。

上記の四つの句をまとめれば、「經典の言葉から離れて、ひたすら坐禅することによつて釈尊の悟りを直接体験する」という意味となるが、それでは、私なりに禅をまとめてみたい。特に教育と関わる点に着目し、5W1Hで考え

てみたい。

周知のように5W 1Hとは英語のWhy' What' Who' Where' Whenのそれぞれの頭文字をとった5Wに Howの1Hを加えたものである。「誰が」「いつ」「ある」「なにを」「なぜ」「どうやって」行ったかを相手に容易に伝えるようにするものである。

### ①Who (誰が)

まず、誰が修行すべきかを見てみよう。道元禪師は『辨道話』において次のように示されている。

この法は、人人の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうることなし。<sup>(44)</sup>

この法(妙法・仏法)は人びとの身の上は何不足なくそなわっているのであるが、修行しないと実現しないし、修行して実証しないと自分のものにならない。池田魯參氏は次のように述べている。

「この法は、人々の分上にゆたかにそなはれりといへども、いまだ修せざるにはあらはれず、証せざるにはうることなし」(『弁道話』)と主張されます。仏の教えは自身に身体化され日常化され、歴史化されて、初めて仏教の存在意義は認められるのだと主張するのです。<sup>(45)</sup>

つまり、自分が修行しないと現れてこない。自分がするしかないのである。

道元禪師が著された『典座教訓』という書物がある。典座とは食事を司るお役である。その中に、次のような有名なエピソードが示されている。これは、道元禪師が宋に渡り、天童山で修行中の出来事を示すものである。

山僧天童にありし時、本府の用典座、職に充たれり。予因みに斎罷つて東廊を過ぎ超然齋に赴くの路次、典座仏殿前にあつて苔を晒す。手に竹杖を携えて頭に片笠なし。天日地輒を熱し、熱汗流れて徘徊すれども、力を励ま



して苔を晒す。やや苦辛を見る。背骨弓のごとく、龍眉鶴に似たり。山僧近前して、便ち典座の法寿を問う。座云く、六十八歳。山僧云く、如何んぞ行者人工を使わざる。座云く、他はこれ吾れにあらず。山僧云く、老人家如法なり。天日かつ恁のごとく熱す。如何んぞ恁地なる。座云く、さらに何の時をか待たんと。山僧すなわち休す。廊を歩する脚下、潜かにこの職の機要たることを覚ゆ。(原漢文)<sup>46</sup>

この文章を佐藤達全師は次のように解説している。

「どうして、もつと若い人にさせないのですか」と質問したところ、「他の人に代わってもらったのでは、私がしたことはありません」という答えがかえってきました。「どうしてこんなにも暑いときに作業をしているのですか」と重ねてたずねると、「きのこをほすのは、暑いときでなければだめなのです」と言つて、手を休めようとはしませんでした。(中略)かけがえのないすばらしい「いのち」を生きているからこそ、一分一秒もおろそかにせず、どんなことにも心を集中して一生懸命に取り組まなくてはならないのです、それが本当の修行であることに、道元さまは気がついたのです。<sup>47</sup>

「他はこれ吾れにあらず」というお示し、つまり、修行は他人に代わってもらうことができず、自分自身で行じなくてはならないことが説かれている。

### ②When (らん)

いつ修行すべきかに関しては、直前の『典座教訓』に「さらに何の時をか待たんと」とあるように、今すべきものである。つまり、自分自身が今するのが修行である。

### ③Where (ふじく)

禅では「今、ここ」という表現が良く使用される。角田泰隆師は「而今・有時」について次のように述べている。人生は、「今」「ここ」「このこと」を「生きてゆく」ということの連続であり、そこに懸命になるしかない。この人生を仏道に生きること、それがまさに道元禅師の「有時」であるということになる。<sup>(48)</sup>このことは、仏道だけでなく、勉学、習い事など総てに通ずる。

#### ④ What (何を)

それでは、何をすべきか。これは第一に「坐禅」である。『辨道話』には次のように記されている。

諸仏如来、ともに妙法を単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり。これ、ただほとけ、仏にさづけ<sup>(49)</sup>てよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧、その標準なり。この三昧に遊化するに、端坐參禅を正門とせ

内容は、すべての諸仏如来は、妙なる仏法を単伝して、無上の菩提を実証するのであるが、その時、最上・無為の妙術がある。これはただ、仏が仏に授けて少しの狂いもないものであるが、それは、自受用三昧がその標準である。この三昧にあそぶには、正しい姿勢で坐禅するのを正門とする。道元禅師は坐禅を仏法の正門とすると説かれている。

瑩山禅師も『坐禅用心記』に次のように示している。

夫れ坐禅は直にして人をして心地を開明して、本分に安住せしむ。是れを本来の面目を露わすと名づけ、また、本地の風光を現すと名づく。<sup>(50)</sup> (原漢文)

また、道元禅師の『随聞記』には、

禅僧の能く成る第一の用心、祇管打坐すべきなり。利鈍賢愚を論ぜず、坐禅すれば自然に好くなるなり。<sup>(51)</sup>

禅僧のよくなる第一の心得は、坐禅の一行だけを、ひたすら、ただ行うことである。頭の善し悪しは関係なく、坐禅

すれば自然によくなると示している。

また、健康面からみても坐禅は素晴らしい修行である。坐禅によつて、セロトニンが産生され、それによりアルファ波が発生し、心が落ち着くという。セロトニンとは、神経伝達物質の一種で、慢性的なストレスにより減少する。セロトニンが不足すると、攻撃性が高まっていわゆるキレる行動を起こしてしまったり、また神経過敏になりパニック障害やうつ病などのきつかけをつくつてしまうという。

先に、『典座教訓』を挙げたが、食事を作ることが下働きの仕事であるという考えに対し、日々の食事作りが如何に大事であり、それを司る典座の役が如何に尊いかということを知らしめるために著わされたものである。

同様に、東司（トイレ）掃除も重要な修行とされる。一般的に、「3K」と呼ばれる、「きつい」「汚い」「危険」という職が敬遠されるが、しかし、禅ではすべてが修行であると考える。仕事だけでなく、日常の総ての所作が修行であり、食事、睡眠、洗面、歯磨き、トイレの入り方、これらに関して道元禅師は「威儀即仏法」として綿密に作法を説かれている。以下、睡眠作法と、洗面作法のみ見てみよう。

### 睡眠作法

『辨道法』には次のように記されている。

大衆は暫く留つて坐禅す。徐徐として被を開き枕を安じ、衆に随つて臥す。留り坐し衆に違して大衆を顧視することを得ざれ。猥りに被位を離れて、或は非処に入ることを得ざれ。ただ衆に随つて臥す、乃ち正儀なり。（原

漢文）

続けて、『三千威儀経』を引用した後、次のように説かれている。

臥するには必ず右脇にして睡れ、左脇にして睡ることを得ざれ。臥する時には当に頭を以て仏に向うべし。いま

頭を以て牀縁に向うは、頭、聖僧に向うなり。覆臥して睡ることを得ざれ。両膝を豎てて仰臥することを得ざれ。身を仰ぎ脚を交えて睡ることを得ざれ。両脚を双べ伸べて睡ることを得ざれ。衫裙を卸して睡ることを得ざれ。赤体無慙にして、外道の法のごとくなることを得ざれ。帯を解きて睡ることを得ざれ。夜臥には当に明相を念うべし。<sup>(52)</sup> (原漢文)

寝るときには、必ず右脇を下にして睡ること、左脇を下にして睡つてはならない。これを「右脇臥」と言う。その他、頭を必ず仏の方に向けるようにすること、うつぶせになって睡つてはならないこと、両膝を立てて上向きに睡つてはならないこと、両足を並べて、まつすぐ伸ばして睡つてはならないことなど、經典に基づき、事細かに睡眠の仕方を記している。

## 洗面方法

次に、洗面方法、『正法眼蔵』「洗面」の巻があり、洗面と嚼楊枝、つまり、齒磨きの仕方についても丁寧の説示されている。

洗うということに関して、「いまだ染汚せざれども澡浴し、すでに大清浄なるにも澡浴する法は、ひとり仏祖道のみに保任せり、外道のしるところにあらず<sup>(53)</sup>」とあつて、汚れていなくても澡浴し、すでに大清浄であつても澡浴する、これが仏祖の教えであり、仏教外の教えには見られないと説かれている。

嚼楊枝には、齒の表面、齒の裏側を磨くようにこすり洗いなさい。何度も何度もこすりみがいて、水できれいにしなさい。齒の根元の肉の上を、良く磨いて洗いなさい。齒と齒の間も、十分にかきととのえて、きれいに洗いなさい。舌をこそぎなさい。という事細かに記されている。舌をこそぐというのは刮舌といい、これも水を口に含んで舌をこそぎおとすこと三回しなさい。「血いではまささにやむべし」と説かれている。<sup>(54)</sup>

「洗面」の巻には、事細かに洗面や嚼楊枝の方法が記されているが、次の文章は当時の国ごとの風習が書かれており、大変興味深い。

天竺・震旦国は、国王・皇子、大臣・百官、在家・出家、朝野男女・百姓万民、みな洗面す。家宅の調度にも面桶あり、あるひは銀、あるひは鑽なり。天祠神廟にも、毎朝に洗面を供ず。仏祖の塔頭にも、洗面をたてまつる。在家・出家、洗面ののち、衣裳をただしくして、天をも拝し、神をも拝し、祖宗をも拝し、父母をも拝す。師匠を拝し、三宝を拝し、三界万靈・十方真宰を拝す。いまは農夫・田夫、漁夫・樵翁までも、洗面わするることなし。しかあれども、嚼楊枝なし。日本国は、国王・大臣、老少、朝野、在家・出家の貴賤、ともに嚼楊枝・漱口の法をわすれず、しかあれども洗面せず。一得一失なり。いま洗面・嚼楊枝、ともに護持せん、補虧闕の興隆なり、仏祖の照臨なり。<sup>(55)</sup>

インドと中国では国王から百姓万民まで皆洗面する。しかし、嚼楊枝はしない。楊枝とは昔は楊（柳）の枝を取り、その端を嚙んで歯を磨き、その汁を使って口を洗ったといわれ、現在の楊枝、爪楊枝、あるいは、歯ブラシとは異なるが、口中の洗浄である。インドにおいては洗面はしないが、口を洗う。しかし、日本では嚼楊枝・漱口の法はあるが、洗面はしない。一得一失、一長一短である。洗面・嚼楊枝ともになされる可きで有り、仏祖の照臨（仏が天上界からご覧になる）である。

「三十七品菩提分法」には、仏法、威儀作法の優れていることを次のように表現する。

いはゆる、正業は僧業なり、論師・経師のしるところにあらず。僧業といふは、雲堂裏の功夫なり、仏殿裏の禮拜なり、後架裏の洗面なり。<sup>(56)</sup>

正しい行いとは僧侶の行いであり、これは僧堂の坐禪工夫であり、仏殿における仏祖に対する礼拝であり、後架洗面所における洗面や嚼楊枝であると説かれている。坐禪と洗面とが同列であることが重要である。

⑤ Why (なぜ)

次に、何故修行すべきかを見てみたい。道元禅師の『辨道話』第七問答には次のように記されている。

とふていはく、この坐禅の行は、いまだ仏法を証合せざらんものは、坐禅辨道してその証をとるべし。すでに  
仏正法をあきらめえん人は、坐禅なにのまつところかあらむ。

しめしていはく、癡人のまへにゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたへがたしといへども、さらに訓をたる  
べし。それ、修・証はひとつにあらずとおもへる、すなはち外道の見なり。仏法には、修証これ一<sup>57</sup>等なり。

ここには「修証一如」が説かれている。修とは修行、証とは悟り。一般的には修行は手段であり、悟りを開けば不要  
になるという考え方であるが、道元禅師は修証一如、つまり、修行と悟りは一つであると説かれた。修行している姿  
が悟りの現れである。それ故、悟りを得た後、正法を明めた後に坐禅は不要ではないかという質問に対して、「癡人  
のまへにゆめをとかず、山子の手には舟棹をあたへがたし」とばつさり切り捨て答えている。「修証一如」であるか  
ら、不断に修行し続ける。修行に終わりはないのである。

これは、「どうして勉強するのか」という質問に対する答えにも当てはまる。いい高校に入るために勉強する。何  
故か。いい大学に入るため。いい大学に入るために勉強する。何故か。いいところに就職するため。このように一般  
的には勉強が手段と考えられているがそれで良いのであろうか。学ぶために大学に入る。つまり、学ぶことそれ自体  
が目標にならなくてはいけない面もある。手段だけで、目標になつていないから、簡単に退学者や留学者が増えて  
いるのではないかと思う。生涯学習などで学習する社会人は学ぶために来ているから、本気で勉強している。

次に、『随聞記』を見てみよう。ここにも学ぶとは何か、学ぶ目的が説かれている。

一日、示に云く、我れ在宋の時、禅院にして古人の語録を見し時、ある西川の僧の道者にて有しが、我れに問う

て云く、なにの用ぞ。云く、郷里に帰つて人を化せん。僧云く、なにの用ぞ。云く、利生のためなり。僧云く、畢竟して何の用ぞ。

予、後にこの理を案ずるに、語録公案等を見て、古人の行履をも知り、あるいは迷者のために説き聞かしめん、皆是れ自行化他のために無用なり。只管打坐して大事を明らめ、心の理を明らめなば、後には一字を知らずとも、他に開示せずに、用ひ尽くすべからず。故に彼の僧、畢竟して何の用ぞとは云ひけると、是れ真実の道理なりと思うて、その後語録等を見る事とどめて、一向に打坐して大事を明らめ得たり。<sup>59</sup>

在宋中のエピソードである。道元禪師が西川の僧と真摯に問答されている。西川の僧が、「なにの用ぞ」「畢竟して何のようぞ」と答えていることが面白い。さて、この『随聞記』のエピソードについて、佐藤達全師は次のように解説されている。

道元さまが中国で修行していたとき、「語録」といって、昔の立派な人が書き残した教えを読んでいると、一人のお坊さんから質問されました。「語録を読むのは何のためですか」そこで道元さまが、「日本に帰つて、人びとに教えるためです」と答えると、そのお坊さんは、「それが何のためになるのですか」と重ねて問いかけます。「人びとに利益を与えるためです」というと、さらに、「それが結局のところ、何になるのですか」と追求去れ、とうとう、答えにつまってしまいました。道元さまは、比叡山で修行しているときから、「大藏経」というお経を何度も読み返して、一生懸命に勉強していました。たくさん経典を読んで、お釈迦さまの教えを少しでも多く知ろうと考えていたのです。けれども、中国での体験によつて、それが間違っていることに気づいたのです。学校では、漢字がたくさん書いて、算数の答えが早く出せる子どもが優等生です。家庭でも、机に向かっているとほめられます。そのため、お手伝いする子どもも少なくなりました。でも、勉強するのは、物知りになるためではありません。どのように生きたらよいかを考えるためです。答えは、私たち一人ひとりの足もと

にあります。「仏道をなろうというは自己をなろうなり」という、道元さまの言葉がずしりと響いてきます。<sup>(59)</sup>この中で、佐藤師は「一人前の人間として社会生活が営めるようになるため」、「どのように生きたらよいかを考えるため」に勉強するのであると明確に述べられている。

安彦忠彦氏も次のように述べている。

端的に言えば、「教育」という用語の意味から、子どもが「自立」すること、人間的に一人前になること、社会的に信用される「立派な」人間になることが、忘れ去られつつあるということである。<sup>(60)</sup>

教育というと学問の成績のみに注意がいつてしまいが、根本は子供が「自立」すること、「一人前」になることが重要であると指摘している。これは先の佐藤師と共通する見解である。

安彦忠彦氏は次のように述べている。

社会の変化の激しさに対応することばかりが関心の的になり、個々の子どもの生きる目当てや生き甲斐、人格性・人間性については、ほとんど関心をもたない大人ばかりになっている。その背後には「高学歴社会」があつて、保護者はそれへの対応に追われ、それによって生まれている学歴競争を子どもに強いて、その勝敗にのみ関心が集中し、その子どもの成長への弊害には目を向けない。大人は「受験合格」のために子どもを「訓練 training」しつつあるのみで、「自立」をめざした「教育」を忘れているとともに、いじめ・不登校・問題行動などの、そのような社会状況にみな関係しているにも関わらず、だれもこれを正面から正そうとしない。<sup>(61)</sup>

筆者は、昨年千葉の田舎から都会に引っ越しをした。両地域の子供達の様子を見ると、田舎では塾に通う子供は小学校高学年でポツポツ増えてくるが、都会では小学校低学年から塾に通わせ、中には一週間のほとんどを塾やお稽古に費やしている子供がいる状況である。彼らには友達と遊ぶ時間がない。遊んでいると受験競争に勝てないからであるが、遊びによって学ぶものも多くある。



いうまでもなく大学での教師の使命は、知識の切り売りをするのではなく、卒業後に、自分でものを考えることのできる人間、そういう脳を持った人間を養成することである。<sup>(62)</sup>

良い点数を取る者が何故会社に雇われるかといえば、学校と同様に会社でも良く頑張つて仕事をしてくれるだろうという期待があるからであろう。学生の側も良い会社に就職するために勉強するが、極端な例を出せば、勉強に偏り過ぎて社会に順応できない場合もある。例えば、お医者さんになりたくて、朝から晩まで勉強した。親御さんも学校に送り迎えし、子どもは友達と遊んだこともない。念願の医学部に入學し、国家試験も合格し医者になったが、それで良いのか。医者は医学の知識も必要であるが、患者さんとのコミュニケーションも必要である。

同様な見解を田原総一郎氏は次のように述べている。

私は教育の基本はコミュニケーションではないかとの思いを持っている。友達を作り、人間関係が深まっていくのが学びの第一の基本であろう。ところがそのコミュニケーションがまったく身につけていない学生たちが珍しくはないという現状。(中略)今の教育は「正解」のある問題を解くことを求めるばかりである。小学校、中学校、高等学校や大学まで正解を求め、誤りを排除するという教育ばかりやっている。実はこの教育こそ大きな誤りで、社会に出れば正解などほとんどない。社会に出てからの仕事というのは、ほとんど正解のない問題を解くことなのである。正解を解くにはコミュニケーションは不要で、一人で考え暗記すれば済む。<sup>(63)</sup>

コミュニケーションが教育の基本であるという。さらに、田原氏は次のように述べている。

河上氏は「85、86年からです」と、明快に答えた。ちょうどその頃から、生徒たちが「家庭にいる時」「道路を歩いている時」「教室にいる時」の区別がつかなくなってしまうのだというのである。(中略)彼らはまず、生活の形がほとんど身につけていない。辛いこと、嫌なことに直面すると、精神的、肉体的にすぐに参ってしまふ。非常に傷つきやすく、他人とうまく関係を結べない。また、すぐに切れて、暴力行為に限界がなくなつ

た。一見普通の子供が、時と場合によつて何でも引き起こすようになったとも述べた。<sup>(64)</sup> 教育において、「子どもが「自立」すること、人間的に一人前になること、社会的に信用される「立派な」人間になることが「最も重要なことである。

#### ⑥ Howやうやうして

次にどうやって、どのような態度で修行すればよいか、学んでいけばよいかを見てみたい。

『正法眼蔵』「現成公案」には次のような有名なお示しがある。

仏道をならふといふは自己をならふなり。自己をならふといふは自己をわするるといふは  
万法に証せられるなり。<sup>(65)</sup>

この「現成公案」の箇所に対して、池田魯參師は次のように解説している。

「仏道をならふといふは自己をならふなり、∴」仏道を学ぶ目的は何かといいますと、自己を明らかにすることの一点に尽きると思います。それ以外に仏道を学ぶ目的などありません。何のために生まれ、何をして生きていったらいいのか、この問いに答えるために仏道を学ぶのです。仏教教育が必要な理由も同じです。<sup>(66)</sup>

仏道を習う、仏道を学ぶ目的とは何かと言えば、自己をならうこと、自己を明らかにすることである。池田氏は、「何のために生まれ、何をして生きていく」かを明らかにするためであると解説されている。

それでは、何をして生きていくべきか。この答えが、「万法に証せられるなり」ということである。つまり、自己をならうことは自己（利己的な自己）を忘れる事であり、それは、仏法に身心を投げ入れることであるといえよう。ここに「自己」という頻出されるが、奈良康明師によれば、自己には二つの自己があるという。先の「現成公案」について次のように述べている。

道元は「自己をならうことは自己をわすれること」だといいます。ここには「ならうべき（真の）自己」と「わすれるべき自己」というように、自己に二つの局面があることをいいます。<sup>(67)</sup>

「ならうべき（真の）自己」と「わすれるべき自己」の二つの局面に分類されている。そして、次のようにも述べている。<sup>(68)</sup>

「真実の自己（真の自己）」と「自我的自己」とに分けて自己を捉えている。自己をわすれるとは、自我的自己を真実、法の世界に解放することです。<sup>(69)</sup>

「現成公案」における「自己をわすれる」の自己とは「自我的自己」或いは「利己的自己」であり、この自己を仏法の世界に投じる、放下すると解釈されている。

また、「真実の自己」は「自我的自己」、「はからっている自己」によっては把握できず、仏法の世界に「自我的自己」を放下する、つまり、仏法に従って生きることにより「真実の自己」が実現され、それは同時に真実、法を証することでもあるだろう。

釈尊の悟りとは、通仏教的にいうなら、人間を含む万物を在らしめている（宗教的）真実（法、仏法、仏道などともいう）に生かされていることを自覚し、真実に随順して生きるところに真の自己実現をはかるもの、と筆者は理解している。その真実、法とは、例えば、縁起、無常、無我、無自性、空などの述語で語られている宇宙のおのずからの、事実としてのハタラキと違っていい。そして、真の自己とは通常これが自分だ自己だと意識している「自我的自己」を捨てたところに、ハタラキ出るおのである。<sup>(69)</sup>

「自己をわすれるなり」ということを別の言葉で言い換えて、道元禅師は様々に説示されている。角田泰隆師によれば、「吾我を離れること」、「身心を放下すること」、「仏法に任せること」と様々な表現で説かれているという。<sup>(70)</sup>

また、瑩山禅師も同様に「放下」ということを重視されている。『伝光録』の十八祖伽耶舍多尊者章と二十祖闍

夜多尊者章の二箇所を挙げる。

・若し身心を放下して、心地空廓廓地にして、尤も平生なることを得ん。<sup>(1)</sup>

・諸人者、本心を見得せんと思はば、万事を放下し、諸縁を休息して、善悪を思はず、且らく鼻端に眼を掛けて心に向て看よ。一心寂なる時、諸相皆尽く。<sup>(2)</sup>

「身心を放下」すべきこと、「万事を放下」すべきことが説かれている。現代の世の中では、「自我的自己」を押し出した自己中心的な生き方が主流であり、それを良しとする面が強いと思う。しかし、仏道修行においては「放下」することが極めて重要なのである。

また、修行の心得として、道元禪師は次のように示している。

動静大衆に一如し、死生叢林を離れず。群を抜けて益なく、衆に違するは未だ儀ならず。これはこれ仏祖の皮肉骨髓なり(原漢文)<sup>(3)</sup>。

他の者より抜きんでて修行しても、何の益も無く、大衆と違ったことをするのは決して仏法にかなった正しい振る舞いではない。「自我的自己」を放下し、仏法に随順していくそれは修行道場において修行僧と同じ行動をすることである。

世間では「抜群」を評価するが、殊に修行道場においては、抜群は評価されないのである。皆が起床する時、自分も起床する。皆が掃除する時、自分も掃除する。皆が寝る時、自分も寝る。これが重要であって、「自我的自己」が強い者にとつては特に難しい。

## 六 宗教学校教育の重要性

これまで、禅とは何かについて筆者の視点から簡単に述べた。次に、どうして宗教教育が必要なのであろうか、な

ぜ教育の根底に宗教が必要なのかについて考えたい。桜井秀雄師は次のように述べている。

教育の基底に宗教的な教化の慈念が指定されることがなければ、かけがえのない生命に目覚める人間形成は決して果たされることはない、言うべきでしょう。<sup>(74)</sup>

教育の基底に宗教的な教化の慈念がなければ、人間形成がなされないと述べられている。

個人主義、平等主義が突き進んできた結果が現在の状況である。良くなった点もあるが、今後が不安な面もある。昨今、様々な事件が発生している。<sup>(75)</sup>特に自分勝手な考え方から凶悪犯罪に至るケースが多く成っている。石附実氏は次のように述べている。

すなわち、個人主義の強調はやがて利己主義に走り、自由はわがまま勝手の放縦に陥り、また、国家や公共的なものへの軽視となり、さらには平等が形式的、機械的あるいは量的な平等となりがちになった。つまり、個人的なあり方に進むのではなく、みんな一緒のきわめて画一的、一元的なあり方に傾いた。その意味では、集団に埋没し、自己としての個性のない、ムレやすい人間を生み出すことになってしまったのである。<sup>(76)</sup>

個人主義、自由、平等が戦後謳われたが、それが利己主義やわがままに変化していった面があると指摘している。若原道昭氏も、次のように述べている。

要するに、自分の都合次第、やりたい放題の生き方で、もしかしたら、クレームとか、何とかモンスターと言われるのも、こうした風潮の現れかもしれないと思います。「やりたくなくても、やらなければならぬ。やりたくなくても、やる。やりたいけども、やらない、我慢する。」そういう社会の決まりごとに対する耐性、耐える力が衰えてきているように思います。<sup>(77)</sup>

自由が進み、利己主義が進むと「耐える力」が衰えてきているという。

それでは、「利己主義」は何故生じたのか。高木貞敬氏は次のように述べている。

可愛がり、苦勞して育てたのに、その子どもたちに逆に悩まされ、苦しめられている親は多いが、その反面では、子供を産んでも育てようとしなない、また、子供の教育について真剣に考えようとしなない親も多い。子育てを軽視する無責任な親が増えてきたのは、まことに残念なことであるが、なぜこのような親が増えてしまったのだろうか。脳研究の立場を少し離れて、私的感情をのべると、それは、戦前、戦中に強調された滅私奉公の精神に対する反動として、戦後に生まれた「自分さえよければ世間や他人はどうなってもかまわない」という利己的な風潮に起因しているのではないか。こういう考え方の拡がり、今日の子供をめぐる多くの問題発生の根本的な原因ではないだろうか。<sup>(18)</sup>

高木氏はその原因を戦前の滅私奉公の反動であると推測している。

また、戦後の学校教育にも原因があると石附実氏は指摘している。

戦後日本のこうした畏れと慎みの喪失、いわば卑俗な現世中心主義をもたらしした原因の一つは、教育の方面にあつては、宗教教育の軽視あるいは無視であつたといえる。教育基本法には、明確に宗教教育の条文があり、その第一項に「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならぬ」とうたわれている。にもかかわらず、宗教系の私立学校は別として、国公立の学校ではほとんど宗教の教育は行われていない。イギリスやドイツで公立の学校における宗教教育が義務づけられているのは、きわめて対照的である。道徳が本来的に宗教と深く結びついていることを考えれば、教育の場における宗教の不在はおおきな問題である。<sup>(19)</sup>

宗教教育の軽視により、現世中心主義、卑俗な合理主義が進んでいったと捉えている。齋藤昭俊氏は、宗教的・道徳的教育の重要性を指摘している。

従来、学校教育では科学的知識（科学的真理）のみを教え、宗教的・道徳的真理については全く教えていない。

しかし、人間生活はこの両者のかかわりに成り立っている。<sup>(80)</sup>

学校教育において、科学偏重の教育が主流であり、宗教的・道徳的なことに關しては教えていないことが今日の悪き原因であるとする。

また、石附実氏も同様に宗教教育の重要性を指摘し、「畏れと慎み」の重要性を説いている。

とくに、いちじるしい「現世中心主義」と卑俗な合理主義の横行、それをもたらした、宗教についての教育の輕視、回避、つまりは、人間、現世、合理を超えたものに対する畏れと慎みの欠如こそ最も大きい要素であろう。<sup>(81)</sup>

先に道元禪師などの著作より「放下」という言葉を見たが、「利己的自己を捨てる」という教えが重要であったが、道元禪師は仏法、仏道に対して、自己を放下することが重要であると示している。そして、これこそが仏祖方への報恩に繋がると記している。『修証義』第五章「行持報恩」（『正法眼蔵』「行持」下）には次のように説かれている。

唯当に日日の行持、其報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず、私に費やさざらんと行持するなり。

奈良康明師はこの文章に対して次のように解説している。

その報恩感謝の方法ですが、毎日毎日の生活のなかに仏法をひたすら行じつづけ（行持）ていくことです。それが報恩感謝のあるべきすがたで、そのほかにはありません。朝から晩までの日々の生活の一コマ一コマを大事にし、私たちのいのちを仏法の中にはたらかせていく。あくまでも仏法の生き方にしたがうことが肝要です。自我欲望にふりまわされないよう、努力して生活を行じていくのです。<sup>(82)</sup>

日常の一コマ一コマについて、自我欲望にふりまわされず、「私たちのいのち」を仏法の中に投じ、はたらかせていくことが重要であると述べている。若原道昭氏は、エゴ、自我欲望にふりまわされず公共性の意識の重要性を述べて

いる。

今日のような競争社会のなかでは、人々の意識というのは、ややもすると、自分さえよければいいというふう  
に、私中心になりがちです。(中略)それだけですと、どうしても公共心が失われたり、規範意識が失われてい  
くことが危惧されます。こうした世相に対して、真の共生に目覚める教育こそが求められていますし、仏教を建  
学の精神とする大学こそが、こうした現代社会の要請に十分に応え得る力を持つっていると、私は考えています。<sup>(83)</sup>  
公共性を掲げるためにも、仏教を建学の精神とする学校こそ、現代社会の要請に応えうる力を持つていて指摘  
している。

吉田実盛氏は私立学校の「建学の精神」について次のように述べている。

私立学校の設立目的には、必ずその学校の建学の精神が示され、創設者の意志が明確に刻まれている。これがその  
学校の教育理念の根本であることに相違ないが、その理念がどのように実際の教育上に展開されるのであろうか。<sup>(84)</sup>

それでは、創設者の思い、意志が表れている建学の精神をどのように具体化すればよいか。吉田氏は次のように述  
べている。

各仏教系大学で建学の精神を具現化する最も基本的な活動は学校行事や宗教行事での宗教儀式である。<sup>(85)</sup>

鶴見大学における宗教行事の一つに、「大本山總持寺一泊參禅会」がある。全ての学部の一年生が必修である。その  
他、釈尊降誕会など宗教行事がいくつかある。

また、キリスト教や仏教などの宗教団体が運営する私立学校では道徳科目と同じ位置づけで、必修科目として宗教  
に関する基礎的知識を教授している所が多い。しかし、そこにも問題があるとして吉田氏は次のように述べている。

もう一つの問題は、建学の精神の具現化の方法である。学校行事や宗教行事などは特別行持であつて、頻繁にあ  
るものではない。また学生を強制的に参加させることができない場合も多い。(中略)必修科目として基礎科目



の二に設定されている「宗教」や「仏教学」などという科目がこれを担うことになる。しかし、その設定にもかなり無理がある。<sup>(86)</sup>

それでは何が無理な設定なのか。吉田氏は次のように述べている。

このように見てくると、卒業必修科目である「建学の精神に関わる科目」の場合、その多くは本来その科目が持っているはずの教授内容と建学の精神に関わる教授内容のダブルスタンダードになっていることに気づかされる。<sup>(87)</sup>

その科目が本来有している教授内容と建学の精神に関わる教授内容とのダブルスタンダード（対象によって適用する基準を変えること。二重基準。二重標準。）になっているとの指摘である。多くの宗門大学の場合、「宗教学」「仏教学」「仏教と人間」などという名称で建学の精神に関わる科目が講じられている。

鶴見大学では、学部学科を問わず、すべての一年生に対して「宗教学」が必修であり、筆者はこの「宗教学」が担当である。以前は、前期『般若心経』、後期『法華経』などという仏教中心のテーマで授業が行われていたと聞く。

しかし、それは宗教全般を教えることにはならない。現在は、仏教や禅のみ講ずることはなく、宗教とは何か、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教と宗教全般を教えている。それ故、吉田氏という「本来その科目がもっている教授内容」よりになっていると感ずるが、学生の興味を喚起する点では、意味があると思う。

大学一年生にとっては「宗教学」は興味の対象にはならない。反対に、宗教に対してネガティブな印象を持つ学生が多い。宗教学の授業中アンケートを取ると、宗教に対して「危ない、怪しい、暗い」という否定的なイメージを持つ学生が多い。何故なら、世界情勢を見ても、宗教を伴った戦争が多く報道されている。イスラム国によるテロ行為、イスラエルと隣国との争い、或いは、イスラム教内部のシーア派とスンニ派との争いなど宗教間、宗派間の争いは頻繁に起こっている。

或いは、路上で執拗な勧誘を受けたり、家にまで訪ねてきて勧誘されたりということが理由で、「怖い、怪しい」というイメージを持つている学生が多い。また、戒律や規則のある宗教に縛られたくないという思いもある。

筆者はこの状況に対し、宗教学の授業では、学生の持つているネガティブな宗教のイメージを何とか払拭しよう、興味を起こさせようと苦心している。また、授業の最初の三分間をイス坐禅、最後の五分間に『般若心経』を唱えさせている。授業の始まりのチャイムが鳴ると直後に引磬を鳴らしイス坐禅をさせる。これにより授業を落ち着いて臨むようになる。<sup>(88)</sup>

或いは、吉田実盛氏が、

学生が卒業していく際に十分理解して巣立ち行くべき精神であり、場合によっては、今後の人生の指針ともなる示唆を与えるべき精神である。<sup>(89)</sup>

と述べているが、このことにも注意している。そのため、学生の日頃の関心や悩みなどを仏教思想の立場から話題にしていく授業を心がけている。何のために生きるのか、今、どのような状況かなどである。例を挙げれば、「医師から余命六ヶ月を宣告されたらどうするか」や「自己が亡くなる際に家族に捧げることば」などの感想を書かせることもある。

「医師から余命六ヶ月を宣告されたらどうするか」の問いに対する答えは、多くは旅行に行きたい、家族と暮らす。美味しいものを腹一杯食べるなど自分の本当に臨むことをするという見解が多い。「自己が亡くなる際に家族に捧げることば」の問いに対する答えは、「有り難う」「感謝します」或いは「先立つ不孝をお許し下さい」と答える学生が多い。いずれにしても、人生において何をするか、何のために生きるかを意識させることに効果があると思う。

建学の精神について吉田氏は次のように述べている。

建学の精神はこうであるということ、絶えず振り返ることによって、今の社会の風潮時流に流されない大学運営を心がけるといふことであります。先ほども申しましたが、社会全体に競争が強まっています。うちはそういう競争よりもっと大事なものがあるといふ、その建学の精神に立ち返って、自信を持って、揺るぎない大学運営をしていくということも建学の精神の持つ大切な意味だと思います。<sup>90)</sup>

学校経営上社会の時流に乗ることは重要であるし、そうでないと良くない場合もある。しかし、時には「建学の精神」と「時流」とがマッチしない場合もあると思う。その時は、建学の精神に重きを置くべきであるという考え方がある。

一般社会の価値観と宗教の価値観とが相違する場合がある。例えば、欲望に関して、一般社会は概ね肯定的であるが、宗教は否定的である。道元禅師は「学道の人貧なるべし」、キリスト教も「貧」を説く。このように、時流に対して時にはノーと答える学校運営が必要であり、それこそが宗教系大学の特徴であると思う

若原氏は、次のように指摘している。

その中でさらに、特に仏教系大学は、単にそういう競争のなかで勝ち残ればいいというだけで運営していいのかどうかという、そういうジレンマを、どの大学も抱えておられると思います。仏教系大学というのは、仏教を建学の精神とする大学として、社会変化への向き合い方、対応の仕方を常に意識して運営に当たらなければならぬ立場に置かれています。<sup>91)</sup>

国の方針、文科省の方針と対立する問題があつた場合、大局的観点、仏教的観点から物事、大学運営を考えなくてはならないと若原氏は述べている。

ところで、仏教に対しての世間のイメージはどうであらうか。

保育科の学生の仏教に対するイメージは「暗くて厳しい」であり、明るいイメージのキリスト教とは対照的であ

る。その原因の一つは、仏教に対する知識がほとんどないことで、知らないまま敬遠しているのが実態ともいえる。<sup>(92)</sup>

先にも示したように学生の宗教に対するイメージは概ね否定的である。さらに宗教の中でも総じて仏教は暗いイメージがある。これは葬式や法事のイメージがあるからであろう。それでは仏教色を出さないようにすべきか。若原氏は次のように主張している。

仏教系の大学には、うちの大学が仏教系であることがマイナスイメージを与えるという考えもありました。あまり仏教系大学だということを表に出しすぎると、受験生が集まらない。もう少し宗教色、仏教色を薄めたほうが良いという、そういう意見も学内にはありましたけれども、今はそういう遠慮は要らないと私は思っています。<sup>(93)</sup> あれば、禅のカラーを積極的に出すべきだという。どうしてかと言えば、

現代社会が求めている人間、その基礎となる公共性、倫理性こそがまさに、仏教系大学の教育によって提供でき、一つの重要なものではないかと思っています。<sup>(94)</sup>

現代社会が仏教に求めるものの一つが、「公共性」や「倫理性」という指摘である。知識だけの詰め込みではなく、生き方を教える場を提供することが仏教系の学校には可能なのであり、それが求められているという。

最後に、まとめとして、齊藤氏の見解を見てみたい。

今日的問題として公立学校における宗教教育（仏教教育）は行われていない。そのことが道徳の低下の問題と結びつけられ、大きな人間教育の問題となっている。いじめ、不登校、ひきこもり、自死、ネグレクトなどの人間生活のゆがみ、など多くの精神的不安、不安定は宗教の問題と引き離すことは出来ない。その意味では仏教教育が大きき力となるのが今日的状況といえる。仏教教育は知と信と行によるものであり、人となる道である。それ

は善なるものの実践にあると同時に、宗教的知識の欠落が大きい。時代の悪しき流れには抗し、如何に人としての善なるものを追求することが、人としてあるべき姿であり、仏教を基盤とした人づくりが最も大事であると認識されるからである。<sup>95)</sup>

国公立においては宗教教育を行うことが禁じられており、それを行うことができるのが私立学校の特性であり特権である。また、創設者の意志や熱意のつまった建学の精神は、奉職する者にとって絶えず意識しておく必要があるが、現代社会では重要性が更に高まっている。建学の精神を強調することによって、学校の特色を社会に向かつてアピールし、魅力を感じてくれる若者を引きつけるということもある。また、建学の精神をアピールすることが大学の評価基準にもつながってくる。

社会が直面するさまざまな問題を、これから乗り越え、切り開いていく上で、仏教は大きな役割を果たしうると筆者は思う。それだけ仏教教育の役割も大きいし、それを担う仏教系大学が果たすべき役割も大きいと思う。公立学校ではできない仏教や禅の教えに基づく個性豊かな教育を施し、優れた人材を輩出すべきであると思う。

さて、齋藤氏は教育の目標に関して、次のように述べている。

人間が善い、正しいものとのかわりかで考えられる人間（自己実現の人）であることへの援助が教育であれば、仏教教育はその「かわり」（絶対善・絶対愛とのかわり）に重点をおくものである。従来、教育は人間を人間たらしめる働きであり、人間らしさとは何かといえは、善への働き、正への働き、本来清浄である自性心の開発への働きである。その働きは教育という活動である。<sup>96)</sup>

善を求めるという意識が教育であり、宗教の目標であるという。また、「本来清浄である自性心」の表現は、「自性清浄心」という仏教語を意識していると思われる。この意味するところは、心は自性として（本来）清浄であるが、外来の煩惱によって汚されているというインド以来の仏教思想である。これは大乘仏教の如来蔵、仏性思想に影響を

与えた思想である。これは、自己本具の「光明」ともいえよう。石附実氏は次のように述べている。

自己の内にある「光明」すなわち真理や悟りの可能性の実現、自己の主体性の確立のために、身心を調えること、苦しみに耐えること、鍛錬すること、が大事である。もちろん、それらを支えるのは、ひとえに仏にまみえようとする心であり、修行としての「正身端坐」、すなわちひたすらの坐禅である。<sup>97</sup>

自己の内にある「光明」を発露するためには、身心を調える修行が重要であるという指摘である。このことは、さらに現代的な表現では「大きないのち」といえよう。桐田清秀氏は次のように述べている。<sup>98</sup>

「自分のいのち」のうちに、自分を越えた「大きないのち」が働いていることを気づかせる（宗教教育）心を落ちつけ、心を無にする習慣を養わせる。

学生に対しここまで教育がなされれば本望である。

## まとめ

日本では、国公立学校では法的に宗教教育を行うことが禁止されている。しかし、私立学校では、建学の精神に則り、宗教教育、宗教活動への制約がなく、大いに宗教教育が行われている。宗教系の学校では、仏教、神道、キリスト教などさまざまな宗教、宗派に基づく宗教教育が行われている。

各私立学校には、それぞれの建学の精神があり、それは設立者の意識を反映したものである。このことを教職員は肝に銘じなくてはならないし、急激な少子化現象によって日本のあらゆるレベルの学校が運営の危機に直面させられている現代においては、建学の精神の重要性が高まっている。宗教系の学校では、それぞれの建学の精神のもと、自由で明るい校風がみなぎっており、それらの校風に魅力を感じて集まる学生も多い。

特に、仏教系の学校に関して、若原氏は次のように述べている。

今、近代化の結果たどり着いた私たちのこの社会が直面するさまざまな問題を、これから乗り越え、切り開いていくうえで、仏教は大きな役割を果たしうると私は思っています。また、それだけ仏教教育の役割も大きいし、それを担う仏教系大学が果たすべき役割も大きいと思います<sup>(99)</sup>。

全国に一一五五ある大学のうち、少なくとも六五の大学が仏教系と言われている。一割にも満たないがその役割が大きいという。そのことを意識して教職員は精進していかなければならない。

そして、もっとも重要なのが学生に対する教育であるが、若原氏も述べるように「仏教精神を学んで自分自身の生き方を深く見つめ、社会のさまざまな分野で活躍していただくような人」<sup>(100)</sup>に育っていただくことが目標である。成績のみを重視するのではなく、宗教や道徳を優先し、人格的に優れた人材を社会に輩出しなければならないし、それが仏教系大学に切に求められている。

最後に、宗教には各宗教独自の雰囲気がある。宗教系学校もその雰囲気を大切にし、その雰囲気の中で自ずと宗教的情操や信仰心が養われる環境でありたい。

註

(1) 第四十七回宗門関係学校教職員研修会は平成二八年八月二日から三日、大本山総持寺を会場として開催された。駒澤大学、小牧駒澤大学、愛知学院大学、東北福祉大学、鶴見大学、駒沢女子大学、駒沢女子短期大学、駒澤大学高等学校、駒澤大学附属小牧高等学校、愛知中学・高等学校、世田谷学園中学・高等学校、鶴見大学附属中学・高等学校、豊川高等学校の教職員七四名が参加した。

(2) 平成二八年七月二〇日に「Japan in Depth」に投稿された「寫信彦の鳥・虫・歴史の目」には現代の世相に対して次のような指摘がなされている。



## 一触即発の大乱危機

世界各国でその国が持っていた社会常識、倫理感などが次々と崩れるような事件が相次いでいる。日本では70～80歳台などの老人や年上の女性が20～30代の若者、青年に殺害される事件が目立ってきた。かつては尊属事件などで、若者が年配者を殺傷する事例はあったが、最近のように動機も利他的で見知らぬ人を殺傷に及ぶことはほとんどなかったように思う。

イギリスでは、まさかとみられていたEU離脱を国民投票で決めてしまった。離脱を決めてから慌ててイギリスに不利となる貿易などのEU条件は適用しないで欲しいと言いつけている。イタリア人は駆け出した後で考える国民性を持つが、イギリス人は歩きながら考えるといわれていた。なのに後先の損失を考えず大衆心理に乗ってしまったかのような今回のEU離脱決断は、考え深いとされたイギリスの国民性に似合わない。

アメリカでは、融和が進んでいるようにみえた白人と黒人の分断図が再び鮮明になっている。発端は白人警官が、身分証を出そうとした黒人をいきなり射殺した事から始まった。この行為に反発するデモが全米で起こったが、今度は「白人憎い」と黒人が白人警官数人を射殺、黒人と白人の衝突が全米各地で発生した。すると白人警察官は、無人ロボットを使って取り締まりに乗り出したという。オバマ大統領は「刑事司法制度の中にまだ人種差別が残っているのではないかと述べている。

イラクのバグダットでは一度に約300人が死亡する爆弾テロが発生、一回のテロで犠牲となる人々の数がウナギ上りに増えている。中東や西南アジアでは爆弾テロによる死傷者数に鈍感になってきているようだ。イラク戦争、アフガン戦争、イスラム国のテロなどが相次いで発生しているうちに、人命がどんどん軽くなってきたように思う。

中国もまた、南シナ海問題を巡るフィリピンの国際仲裁裁判所への提訴に対し、前政権で外交トップだった戴秉国前国務委員が「仲裁裁判所の判決などただの紙くずだ」と判決前から批判して驚かせた。中国の立場を事前に鮮明したともいえるが、仲裁裁判所の判決は中国側の全面敗訴だった。中国政府要人やメディアは国を挙げて反発し、南シナ海の領有権は昔から中国のものだったとキャンペーンを繰り返している。

ただ、中国は一方で国際的価値基準を尊重したいとも言ってきた。中国は太平洋進出に関しては一切妥協しない姿勢を



示し続けているが、6月の中国と東南アジア諸国連合（ASEAN）の外相会議でも王毅外相が仲裁裁判所の判断は無視するとの根回しを行ない、カンボジア、タイ、ラオス、ブルネイなどが中国支援にまわりASEANの分断化が事実上明らかになっている。中国は今後も、同じ調子でアジアの分断化を図ってゆくつもりなのだろうか。しかし、カネと力づくで国を抑え込もうとしても、その試みはいずれ失敗しよう。

少なくとも2000年代までは自由な市場主義、各国の主権と人権の尊重、力の支配に対する批判、国際的平等などにして共通の尊重があった。ところが、ここ一二年でそうした常識、規範が一挙に崩れてきたのではないか。どの国も自国優先主義になり他国との国際協調は二の次になってきた。それをあからさまにムキ出しているのが最近の中国の姿であるようにみえる。

問題はこれからの日本の出方だ。裁判所の判決を楯に中国を攻め立てても解決しそうにないし、再び日中関係をこじらせる結果に発展しかねない。まずは中国の狙いが、本当にアジア太平洋進出の軍事拠点の一つにしようとしているのか、それとも漁業や海底資源の獲得にあるのか、あるいはASEANの分断化を考えているのか。日本はまず政府レベルだけでなく、ASEAN諸国や民間レベルなどあらゆるルートから中国を話合いのテーブルにつかせるような努力をし、そのことを世界にみせるべきだろう。その上で中国の本音を知って解決への道を探ることだ。

中国は上り調子の国だが、まだ成熟した国になっているとは言い難い。世界が安定的に成長してゆくには、国際社会が認める国際的な価値基準を尊重すべきことをみんなで説くしかあるまい。世界大乱のきっかけが南シナ海問題から発することだけは、何としても避けるようにするのが日本の役割であり、その覚悟を持つべきだろう。

世界各国の動向、特にイギリス、アメリカ、中国を対象として書かれた記事であるが、慧眼であると筆者は感じる。

(3) 『ブリタニカ国際大百科事典』。

(4) 『世界大百科事典』。『日本大百科全書』には次のように記されている。

諸外国においても公教育と宗教のかかわり方は、ほぼ次のように分かれる。(1) フランスのように公立学校で宗教教育を行わない型、(2) ドイツやイギリスのように公立学校で宗教教育、宗派別宗教教育を行うもの、(3) アメリカのように一般的宗教科目を設けて、一般的宗教教育だけを行うもの、の三類型である。〔田代尚弘〕

- (5) 『2017年度版 必携教職六法』平成二八年、協同出版株式会社、五頁。  
(6) 『2017年度版 必携教職六法』平成二八年、協同出版株式会社、一四頁。教育基本法(旧法)は第九条に「宗教教育」が記されている。

第九条(宗教教育) 宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない。

② 国及び地方公共団体が設置する学校は、特定の宗教のための宗教教育その他宗教的活動をしてはならない。『2017年度版 必携教職六法』平成二八年、協同出版株式会社、一五頁。

- (7) 『2017年度版 必携教職六法』平成二八年、協同出版株式会社、一五六頁。

(8) 文科省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/shinkou/main5\\_a3.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shinkou/main5_a3.htm))。

(9) 大学基準協会ホームページ ([http://www.juaa.or.jp/images/accrrediation/pdf/e\\_standard/university/u\\_standard.pdf](http://www.juaa.or.jp/images/accrrediation/pdf/e_standard/university/u_standard.pdf))。

(10) 文科省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chuky04/027/sryo/attach/1292223.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuky04/027/sryo/attach/1292223.htm))。

(11) 文科省ホームページ ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chuky04/027/sryo/attach/1292223.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chuky04/027/sryo/attach/1292223.htm))。

(12) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、七頁)。

(13) 国・私立大の「授業料」格差は、33年間で5.1倍→1.6倍に、縮小。昭和50年度、国立大授業料は3万6000円、私立大授業料(平均)は18万2677円で、私立大の授業料は国立大の5.1倍であった。翌51年度には前述のような国立大の大幅な値上げによって、国立・私立の授業料格差は2.3倍に縮まった。その後は昭和56年度まで、国・私立の格差は2倍台を推移。さらに、昭和57年度の1.9倍、昭和58年度の2.0倍を経て、昭和59年度以降は1倍台後半(昭和61年度は2.0倍)を推移し、平成9(1997)年度以降は20年度まで1.6倍を維持している。

教育情報センター平成二二年三月(旺文社ホームページより(アドレス略))。

河合塾のホームページにも、最近の大学受験の傾向が記されている。

ここ数年の入試で顕著だったのは、景気の低迷を背景にした国公立大学志向、地元志向などでした。2008年秋に起こったリーマンショックをきっかけに、国公立大学の志願者数は増加しました。国公立大学は私立大学に比べて学費が安いことなどから、不況時には人気となるのです。2015年度は新課程入試に移行了するため、センター試験では理科の科目負担が増えまし

た。このため、国公立大学を敬遠する動きが見られ、国公立大学の志願者はやや減少しました。2016年度も国公立大学の志願者は前年並みにとどまり、人気は落ち着いています。以前にも国立大学の科目負担が増え、国公立大学の志願者が大きく減少したことがあります。景気など社会環境はもちろん、入試の変化が志願動向に影響を与えることがあるのです。私立大学の延べ志願者数はここ数年増加を続けています。これは私立大学を志望している受験生が増加しているというよりは、受験料割引などの制度が拡充され、一人あたりの受験校数が増加しているからです。私立大学全体の志願者数は増加している一方で、半数近い私立大学が入学定員割れを起こしているのはこのためです。学部系統の人気も変化しています。10年ほど前は大手メーカーの好業績により、大学生の就職状況がよかった時期でした。この頃人気があったのは経済系や工学系でした。2008年秋のリーマンショック後、大学生の就職が厳しくなると、理系や資格に直結する学部が人気となりました。とくに医師、薬剤師など医療系の学部・学科で志願者の増加が目立ちました。再び変化が訪れたのは2015年度です。企業の採用が改善したことに加え、長らくの文系不人気から狙い目と映る文系学部が出ていることなどから、文系の人気が回復しました。一方、理系人気の代表格だった理学系で志願者が減少しており、学部系統の人気は文低理高から文高理低へと変化しています。

(傍線筆者)

(14) 毎日新聞二〇一六年七月一日記事。「河合塾の大学入試情報サイト大学進学を考えるにあたって」<http://www.keinet.ne.jp/basic/201-1.htm>。

(15) 井上順孝『図解雑学宗教』(ナツメ社、二〇〇一年、二三二頁)。

(16) バテレン追放令。一五八七年七月二四日(天正一五年六月一九日)に筑前箱崎(現・福岡県福岡市東区)において豊臣秀吉が発令したキリスト教宣教と南蛮貿易に関する禁制文書。バテレンとは、ポルトガル語で「神父」の意味の padre から由来。原本は『松浦家文書』にあり、長崎県平戸市の松浦史料博物館に所蔵されている。通常、「バテレン追放令」と呼ばれる文書はこの『松浦家文書』に収められた六月一九日付の五か条の文書を指す。『吉利支丹伴天連追放令』原文を付す。

定

・ 日本ハ神國たる處、きりしたん國より邪法を授候儀、太以不可然候事。

・ 其國郡之者を近附、門徒になし、神社佛閣を打破らせ、前代未聞候。國郡在所知行等給人に被下候儀者、當座之事候。

天下よりの御法度を相守諸事可得其意處、下々として猥義曲事。

・伴天連其智恵之法を以、心さし次第二種那を持候と被思召候へバ、如右日域之佛法を相破事前事候條、伴天連儀日本之地ニハおかせられ間敷候間、今日より廿日之間ニ用意仕可歸國候。其中に下々伴天連儀に不謂族申懸もの之之ハ、曲事たるへき事。

・黒船之儀ハ商賈之事候間、各別に候之條、年月を経諸事實買いたすへき事。  
・自今以後佛法のさまたけを不成輩ハ、商人之儀ハ不及申、いつれにてもきりしたん國より往還くるしからず候條、可成其

意事。

已上

天正十五年六月十九日

朱印

要旨は、日本は神国であり、邪法であるキリスト教が説かれることは不適當である。よつて宣教師は二〇日間以内に国外退去しなさい。

(17) 江戸幕府は慶長一七年三月二日(一六一二年四月二日)に江戸・京都・駿府を始めとする直轄地に対して教会の破壊と布教の禁止を命じた禁教令を布告したが、これ自体はあくまで幕府直轄地に対する発布であつた。そして翌年の一六一三年年に全国に発布した。

(18) 一八七三(明治六)年、明治政府は「太政官布告第六八号」を発し、キリスト教禁制の高札を撤廃した。これは条約改正のためのやむを得ざる措置であつて、信教の自由公認とはほど遠いものではあつたが、これによってキリスト教宣教活動が行えるようになったのである。(青学ホームページ)

(19) 安嶋彌「明治のキリスト教系私学について」(『国立教育政策研究所紀要』一四一集、平成二四年三月、二七三頁)。

(20) 文部科学省ホームページ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/ohers/detail/1317735.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/ohers/detail/1317735.htm))。このような宗教政策の背後には神道を非宗教化する意図があつたといつた。

このようにして、近代日本の神道の目まぐるしい教化体制変遷の底流には、常に信教の自由を越えて、神道を非宗教化し、全国民的習俗として普遍化し、国家神道樹立を着実に実現してゆこうとする権力の胎動があることを見過ごしては

ならない。かくして国家神道は、天皇制国家を支える支柱として新たな進展をみたのであった。『図説日本仏教の歴史近代』平成八年、校正出版社、一五五頁。

(21) 清涼寺雪爪清拙(一一八一—一九〇四)は、曹洞宗の禅僧であったが、五五歳で還俗し鴻雪爪として政教問題解決に打ち込んだ。肉食妻帯に関して、仏教を貶めるためではなく、仏教護持のための運動とする見解もある。

雪爪は維新政府の宗教政策に映じた「僧侶遊民」の批難や、「僧侶身分の廃絶」の見解い対して、仏教界からの反対を覚悟の上で、窮状の打開を肉食妻帯の僧侶身分の公認を求めたのであった。これは、政府内の廃仏論を阻止し、僧侶身分を戸籍編成上に、あらためて位置づける糸口を確保しようとする極めて現実的な仏教廃絶防止の具体策であったといえよう。『図説日本仏教の歴史近代』平成八年、校正出版社、五五頁。

(22) 月尾嘉男『日本が世界地図から消滅しないための戦略』平成二七年、致知出版社、五八頁。

(23) 月尾嘉男『日本が世界地図から消滅しないための戦略』平成二七年、致知出版社、一三三頁。

(24) 月尾嘉男『日本が世界地図から消滅しないための戦略』平成二七年、致知出版社、七八頁。明治に培われたシステムが現在では機能不全に陥っていると月尾氏は指摘されているが、改善策も挙げている。

日本が近代以後推進してきた諸政策は、むしろ日本の伝統に反するものが多かった。近代化を実現するために、日本は身の丈に合わない西洋的な価値を無理やり日本に移植してきた面が多分にある。今、その西洋的な価値に逆転潮流が起きているのだとすれば、日本はむしろ自分たちが本来得意とする伝統的な路線に立ち戻ればいいだけではないか。近代化のために捨ててきた日本的な価値を今一度見直し、再興することが、日本が逆転潮流に乗り、再浮上するチャンスを与えてくる可能性がある。月尾氏は言う。

そうした中で今後の日本の浮沈の鍵を握るのが、「文化」だと月尾氏は言う。

物質的な豊かさを追求することで、経済大国にはなったが、その間、われわれが置き去りにしてきた精神的な豊かさが、これからの世界の変化にも沿った新たな魅力になり得るといふのだ。事実、日本の伝統や文化は国際的にも高い評価を受けている。多くの外国人がアニメや日本食などを目当てに日本に来日し、今も残る豊かな自然に感嘆して帰っていく。これまで物質的な豊かさをもたらしてきた経済力や工業力を、今後はより内面的・精神的な豊かさが実感できる文化や自然

のソフトパワーに置き換えていくことが、日本が再浮上するきつかけを与えてくれるはずだと月尾氏は語る。

そもそも文化がない国は、存続するに値しないと言い換えることもできる。地球規模で考えた時、工業力や物質的な繁栄であれば、どこに国が残っていても大差はない。しかし、日本独自の文化は日本が生き残らなければ、存続させることができない。存続するためには、まず存続に値する文化を誇れる国にならなければならぬということだ。

国立大学など一律、単一的なあり方は明治になって起り、それにより日本の成長が成し遂げられたが、現代は多様なあり方が求められるという。宗教系私学が一翼を担うべきであろう。

- (25) 上智大学ホームページ ([http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia\\_spirit/sophia-idea/kengaku](http://www.sophia.ac.jp/jpn/aboutsophia/sophia_spirit/sophia-idea/kengaku))。
- (26) 国際基督教大学 (<http://up-j.shigaku.go.jp/school/category01/00000000260801000.html>)。
- (27) 聖心女子大学ホームページ (<https://www.u-sacred-heart.ac.jp/about/rinen.html>)。
- (28) 東京女子大学ホームページ (<http://office.twcu.ac.jp/univ/about/introduction/spirit/index.html>)。
- (29) 青山学院大学ホームページ (<http://up-j.shigaku.go.jp/school/category01/00000000259101000.html>)。
- (30) 青山学院ホームページ ([https://www.aoyamagakuin.jp/education/consistency/scene\\_univ.html](https://www.aoyamagakuin.jp/education/consistency/scene_univ.html))。  
「命を照らす光」青山学院高等部理科教諭  
イエスの言葉に出会うとき、私たちはその光に照らされます。(中略)私たちが「イエス」という光を捉えるとき、人生の輝きは大きく変わります。私は自分の力で太陽のように輝こうとするのは傲慢であることに気が付きました。イエスの光を受け、それを反射することが私の人生の目標です。  
これは回向返照という極めて禅的な発想に近い。この意味は「外に求める心を内に返し向けて、自らの内なる智慧の光で、自己の仏性を照らせ」ということである。
- (31) 立教大学ホームページ (<https://www.rikyo.ac.jp/aboutus/philosophy/spirit/foundation/>)。
- (32) 駒澤大学ホームページ (<https://www.komazawa-u.ac.jp/about/philosophy/principle.html>)。
- (33) 愛知学院大学ホームページ (<http://www.agu.ac.jp/smp/guide/ideal/>)。
- (34) 東北福祉大学ホームページ (<http://www.tfu.ac.jp/aboutus/idea.html>)。

- (35) 駒沢女子大学ホームページ (<http://www.konajo.ac.jp/uni/guidance/spirit.html>)。
- (36) 橋本弘道「中根環堂初代校長の教育理念と宗教教育」(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』一九号、平成二六年、一三頁)。特に大学としては一九六三年(昭和三十八年)に創立四十周年記念、また、二祖国師峨山韶碩禪師六百回大遠忌に鶴見女子大学が設立された。
- (37) 鶴見大学学則、第一章総則第一条。鶴見大学ホームページより(アドレス略)。
- (38) 鶴見大学ホームページ (<http://www.tsurumi-u.ac.jp/about/spirit.html>)。
- (39) 橋本弘道「中根環堂初代校長の教育理念と宗教教育」(『鶴見大学仏教文化研究所紀要』一九号、平成二六年、七頁)。
- (40) 中村元『仏教語大辞典』昭和五六年、東京書籍、八五三頁。
- お釈迦さまが静かに瞑想したのは、そうした修行の方法がインドに古くから伝わっていたからです。それは「ドフヤーナ」や「ジャーナ」と言う名前でよばれていました。その後、お釈迦さまの教えが、中国に伝えられたとき、瞑想を意味する「ジャーナ」を発音がにている「禅」という漢字で表現したのです。そして、手と足を組んですわることから「坐禅」とも言われるようになりました。ところで、曹洞宗を禅宗ということがあります。それは、曹洞宗の教えが、坐禅をすることをとても大切な修行と考えているからです。もちろん、お悟りをひらいたお釈迦さまの姿からもわかるように、坐禅を行うのは曹洞宗だけではありません。でも、曹洞宗では、坐禅はお釈迦さまがお悟りをひらいたときの姿であるとして大切にしているのです。その一方で、禅の修行では「作務」や「勤行」も坐禅と同じように大切なものとされています。(中略)つまり、起きてから寝るまで、一日の行動すべてが坐禅と同じ意味をもっていると考えているのです。佐藤達全『日常生活と禅の教え』(二〇一四年、常仙寺、二九—三〇頁)。
- (41) 田上太秀・石井修道『禅の思想辞典』(二〇〇八年、東京書籍株式会社、一一頁)。
- (42) 中村元『仏教語大辞典』昭和五六年、東京書籍、八五五頁。同辞典の【禅】の項目には次のように記されている。
- 〔解説〕迷いを断ち、感情を静め、心を明らかにして、真実な理法を体得することをいう。大乘仏教の実践徳目である六波羅蜜の第五。釈尊以前に古くからインド人はこうした習慣を伝えてきていた。その起源は、おそらく遠くインダス文明にまでさかのぼると考えられる。精神統一の修行は特に仏教において重んぜられるようになった。禅はシナにおいて特異の発達

を遂げ、禪宗という宗派までも成立し、日本に伝わってさらにこれが深められた。禪には心理学的・精神身体医学的見地からみて注目すべき点が多くあると考えられ、この方面からの研究も進められている。中村元『佛教語大辞典』東京書籍、昭和五六年、八五三頁。

- (43) 中尾良信『図解雑学禪』ナツメ社、二〇〇五年、二〇〇頁。(44) 「辨道話」『正法眼蔵』(『道元禪師全集』春秋社、第二巻、四六〇頁)。
- (45) 池田魯參「禪の教育法」(『日本仏教教育学研究』二三号、平成二七年、一四頁)。
- (46) 『典座教訓』(『道元禪師全集』春秋社、第六巻、一〇―一二頁)。
- (47) 佐藤達全『日常生活と禪の教え』(二〇一四年、常仙寺、三二―三三頁)。
- (48) 角田泰隆『道元禪師の思想的研究』(二〇一五年、春秋社、三九七頁)。
- (49) 「辨道話」『正法眼蔵』(『道元禪師全集』春秋社、第二巻、四六〇頁)。
- (50) 『坐禪用心記』(『常済大師全集』二四三頁)。
- (51) 『随聞記』巻二(『道元禪師全集』春秋社、第七巻、六六頁)。
- (52) 『辨道法』(『道元禪師全集』春秋社、第六巻、二九頁)。
- (53) 『正法眼蔵』「洗面」(春秋社『道元禪師全集』第二巻、三九頁)。
- (54) 『正法眼蔵』「洗面」(春秋社『道元禪師全集』第二巻、四五頁)。
- (55) 『正法眼蔵』「洗面」(春秋社『道元禪師全集』第二巻、五三頁)。
- (56) 『正法眼蔵』「三十七品菩提分法」(春秋社『道元禪師全集』第二巻、一四八頁)。
- (56) 『正法眼蔵』「洗面」(春秋社『道元禪師全集』第二巻、四九―五〇頁)。
- (57) 「辨道話」『正法眼蔵』(『道元禪師全集』春秋社、第二巻、四七〇頁)。
- (58) 『随聞記』巻三(春秋社『道元禪師全集』第七巻、九〇頁)。
- (59) 佐藤達全『日常生活と禪の教え』(二〇一四年、常仙寺、五九―六〇頁)。
- (60) 安彦忠彦「小中高一貫教育の構想」6・3・3制を見直す(『神奈川大学心理・教育研究論集』三四号、二〇一三年、五頁)。



- (61) 安彦忠彦「小中高一貫教育の構想」6・3・3制を見直す」（『神奈川大学心理・教育研究論集』三四号、二〇一三年、五頁）。
- (62) 高木貞敬『子育ての大脳生理学』（一九八六年、朝日新聞社、一五一頁）。
- (63) 田原総一郎『緊急提言！デジタル教育は日本を滅ぼす！便利なが人間を豊かにすることではない』（二〇一〇年、株式会社ポプラ社、二八頁）。
- (64) 田原総一郎『緊急提言！デジタル教育は日本を滅ぼす！便利なが人間を豊かにすることではない』（二〇一〇年、株式会社ポプラ社、一六二頁）。
- (65) 『正法眼蔵』「現成公案」（春秋社『道元禪師全集』第一巻、三頁）。
- (66) 池田魯參「禪の教育法」（『日本仏教教育学研究』二三号、平成二七年、二二頁）。
- (67) 奈良康明「禅」「仏への道」と「仏の道」（『在家佛教』二〇一六年、一八頁）。
- (68) 奈良康明「釈尊「六年苦行」をめぐって―自我からの自由」（『愛知学院大学禅研究所紀要』第四号、平成二八年、二二七頁）。
- (69) 奈良康明「仏教・禅と祈り」（『東方』第三二号、二〇一六年、一七五頁）。
- (70) 角田泰隆『道元禪師の思想的研究』（二〇一五年、株式会社春秋社、二八二―二八三頁）。
- (71) 『伝光録』第十八祖章（『常済大師全集』七一頁）。
- (72) 『伝光録』第二十祖章（『常済大師全集』七六頁）。
- (73) 『弁道法』（春秋社『道元禪師全集』第六巻、二七頁）。
- (74) 桜井秀雄「教育と教化」（『日本仏教教育学研究』一号、平成五年、日本仏教教育学会）。
- (75) ストーカー事件、無差別殺人事件なども利己的な面が強い。特に若い方に多い。  
 例えば、本年（平成二十八年）東京都目黒区の区立碑文谷公園内の池で、無職の阿部祝子さん（八十八）の切断遺体が見つかった事件で、警視庁碑文谷署捜査本部に九日、死体遺棄容疑で逮捕された世田谷区野沢、自称無職、池田徳信容疑者（二十八）が、関与を認める供述を始めたことが分かった。この事件も、盗みに入っただけで見つかったから殺害するという我が儘放題の犯罪であった。  
 また、本年（平成二十八年）相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で十九人が刺殺され二十六人が負傷した事件

で、元施設職員植松聖容疑者（二十六）が、「（障害者を）今は抹殺することが救う方法」と供述したという。これも極めて独善的な考えが事件の背景にあった。本年起こった二つの重大事件は共に二十代の犯行であり、身勝手な振る舞いを是とする生き方、考え方によるものである。

- (76) 石附実「今後の人間教育と教育学のあり方―仏教から学ぶもの―」『仏教と教育』（『仏教教育選集3』）平成三年三月、一七頁。
- (77) 若原道昭「大学における仏教教育」（『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、一八頁）。
- (78) 高木貞敬「子育ての大脳生理学」（一九八六年、朝日新聞社、二二二頁）。
- (79) 石附実「今後の人間教育と教育学のあり方―仏教から学ぶもの―」『仏教と教育』（『仏教教育選集3』）平成三年三月、一七頁。
- (80) 齋藤昭俊『慈悲の教育』（『仏教教育選集1』）平成二三年三月、二六七頁。
- (81) 石附実「今後の人間教育と教育学のあり方―仏教から学ぶもの―」『仏教と教育』（『仏教教育選集3』）平成三年三月、二五頁。
- (82) 奈良康明『修証義私釈』一九九〇年、新塔社、六一頁。
- (83) 若原道昭「大学における仏教教育」（『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、一二頁）。
- (84) 吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」（『日本仏教教育学研究』一一号、平成一五年、一三四頁）。
- (85) 吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」（『日本仏教教育学研究』一一号、平成一五年、一三六頁）。
- (86) 吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」（『日本仏教教育学研究』一一号、平成一五年、一三七頁）。
- (87) 吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」（『日本仏教教育学研究』一一号、平成一五年、一三八頁）。
- (88) 山川健次郎は東京帝国大学総長に二度就任したことで有名であるが、明治四〇年（一九〇七）に九州に創設された明治専門学校（現九州工業大学）の設立に尽力し、私立学校の教育に寄与した。授業に関して次のようなエピソードがある。大いに学ぶべきであると思う。

健次郎もまた關齋同様、学問は武士の真劍勝負であるという認識で教壇に立っていた。彼には、学問を教えることは、知識を切り売りするのみならず、生徒の人格を陶冶することも大切である、との信念があった。さらに、彼の時間厳守は私生活におけると同様、講義でも徹底していた。時間勵行で始業の鐘が鳴り終わらないうちに教室に現れ、終業合図の鐘と同時にサツと切り上げて退失する。『評伝 山川健次郎―士君子の肖像―』平成二五年、山川健次郎顕彰会、一〇一頁。

(89) 吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」(『日本仏教教育学研究』一一号、平成一五年、一三八頁)。

(90) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、八頁)。宗教系私学の運営に関して教職員  
の信仰が問われる場合がある。吉田氏は次のように述べている。

私学に奉職する以上、その建学の精神を理解し、共感し、その具現化を推進するのは当然の義務であるという考えがある  
一方で、学校が私学である以上、独自の精神があるのは理解できるが、個人の信教の自由は認められるべきであって、全  
員に建学の精神の具現化を推進する義務はないという考えも存在する。

吉田実盛「建学の精神の具現化への授業科目の可能性」(『日本仏教教育学研究』一二号、平成一五年、一三六頁)  
信仰が必要か、或いは信教の自由が優先されるという様々な議論がある。これは、保育園の現場でも問われているという。

保育の現場で仏教保育に関する研修を行うことが現実的で、園長や設置者の役割が大きい。その場合にも①保育活動に  
保育者の信仰が必要か。②仏教保育に対する園長・設置者の意識が高いか。③保護者がどのように反応するか。といった  
ことを考えなくてはならない。

佐藤達全「仏教保育と保育者の信仰について——キリスト教保育・神道保育と比較して——」(『日本仏教教育学研究』  
一四号、平成一八年、一三五頁)

また、キリスト教主義学校においてはキリストチャンドというものがあり、運営のトップはキリスト教徒であるべきとい  
う規定がある。建学の精神を堅持して行くための方法の一つとしての制限であるが、今日、多くのキリスト教主義学校では、  
設立以来の歴史にもかかわらず、キリスト者の教職員が少数であることが問題点として指摘されており、キリストチャン・コー  
ドを維持している学校は多くない。特に、大学において学長がキリストチャンであることの制限が外される傾向にある。これ  
は、キリスト教信者の絶対数も少なく、建学の精神よりも、学校運営の経営面が重視されているからだと推測する。

(91) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、六頁)。

(92) 佐藤達全「仏教保育と保育者の信仰について——キリスト教保育・神道保育と比較して——」(『日本仏教教育学研究』一四号、平  
成一八年、一三五頁)。

(93) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、七頁)。

- (94) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、一三頁)。
- (95) 齋藤昭俊「仏教教育学の今日的課題」(『日本仏教教育学研究』二三号、平成二七年、五頁)。
- (96) 齋藤昭俊『慈悲の教育』(『仏教教育選集1』平成二二年三月、二六四頁)。善を求めるといふ態度は釈尊の出家に求められるところ。
- スバツダよ。私は二九歳で、何かしら善を求めて出家した(『涅槃経』)。
- 田上太秀「仏教教育とは何か」(『日本仏教教育学研究』一六号、平成二〇年、一頁)。
- (97) 石附実「今後の人間教育と教育学のあり方―仏教から学ぶもの―」『仏教と教育』(『仏教教育選集3』平成二三年三月、二二頁)。
- (98) 桐田清秀「期待と課題―価値観の再構築をめざして―」『仏教と教育』(『仏教教育選集3』平成二二年三月、二二九頁)。
- (99) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、二二頁)。
- (100) 若原道昭「大学における仏教教育」(『日本仏教教育学研究』二二号、平成二五年、三頁)。